

鹿児島大学 共通教育 英語教育活動報告書 Ⅲ

—英語教育の成果について—

令和2（2020）年7月

鹿児島大学 総合教育機構

共通教育センター

外国語教育部門（既修語系）

目次

序：本報告書について	1
A. 教育内容について	1
A-1. カリキュラムの内容について	1
A-2. 開講コマについて	3
A-3. テキスト・教材について	6
A-4. 成績分布について	8
A-5. 習熟度別クラスの運用について	9
A-6. 授業での挑戦について：速読、多読、多聴	9
B. アンケート結果について	21
B-1. 共通教育科目授業改善に資するアンケートについて	20
B-2. 令和元（2019）・平成30（2018）年度 鹿児島大学 IR コンソーシアム・ アンケートについて	33
B-3. 鹿児島大学の学修成果に関する学部卒業生調査について	36
B-4. CEFR-J アンケートについて	37
C. 外部試験について	45
C-1. GTEC 実施・結果について	45
C-2. EF SET 実施・結果について	47
D. 外国語ラウンジの活動について	48
E. 外国語教育部門（英語）の運営について	52
E-1. 英語教員の役割	52
E-2. FD 活動（ワークショップなど）について	53
E-2-1. 平成30（2018）年度第1回共通教育センター教員ワークショップ	53
E-2-2. 平成30（2018）年度第2回共通教育センター教員ワークショップ	54
E-2-3. 令和元（2019）年度 第2回外国語教育部門教員ワークショップ	55
E-2-4. 本ワークショップの意義と今後の課題	56
E-3. 報告書について	56
F. その他の活動について	57
F-1. 補習教育について	57
F-2. 修学支援について	58
結語	58

序：本報告書について

本報告書は、タイトル「英語教育の成果について」の名の通り、鹿児島大学共通教育センター英語教育の成果を示すものである。エビデンス（あらゆるデータ）で英語のプログラムを分析・評価する。使用する分析方法はデータのいわゆる三角測量で、多面的な角度から質的と量的なデータを用いながら分析する方法である。この報告書で集めたエビデンスによって、共通教育英語の健全さを訴える。

しかし、本文に入る前に、英語を習う理由について考えたい。つまり、Why study English? という率直な質問に答えたい。この質問に返答できなければ、おそらく良い英語プログラムが作れない。日本政府が「英語が使える日本人」を育成しようとしている。これは単にコミュニケーションのための英語を重視しているという意味であろう。特に Why の質問に答えてはいない。もう一つのスローガンを見てみよう。日本政府が「グローバルに活躍できる人材」の必要性を謳っている。確かにグローバル人材育成教育は必要である。例えば、国際ビジネスコミュニケーション協会が実施したアンケート「上場企業における英語活用実態調査」によると、1) 75%の企業で英語が使用されている、2) 英語使用部署では4技能のバランスが取れた英語力が必要とされている、3) 4割以上の企業が英語能力向上を重視している、などの結果が出た。グローバル化が進むにつれて、英語運用能力の必要性が益々高まっているという現象は否定できない。大学を卒業した新入社員もこれを感じている。例えば、産業能率大学が実施したアンケートによると、新入社員の半数近くが自分の大学で受けた英語教育に不満を持ち、自分の英語力に自信がないということが分かった。

社会のニーズ、会社のニーズに応えるため、大学の英語教育が存在する、ということと言える。英語教育が大事な役割を果たしている。但し、英語教育を単に英語ビジネス実利のための道具・技能として考えるのはいかながなものであろうか。実用のための英語があり、教養のための英語もある。Why study English? という問いかけに対して、実用的な理由が最初に思い浮かぶであろう。これでも良い。間違っていない。しかし、これ以外・これ以上の理由もあるに違いない。共通教育英語は実用的な側面を持ちながら、教養的な部分を残している。「グローバル人材の育成」というスローガンより、「グローバル市民の育成」の方が長い目で見ればグローバル化の時代に一番通用する英語教育だと考えているからである。平成28(2016)年度に導入した共通教育英語のカリキュラムが同じような二刀流的な概念を貫いている。このようなカリキュラムを守る価値があると思っている。

A. 教育内容について

A-1. カリキュラムの内容について

鹿児島大学共通教育センターの英語教育目標は以下の通りである。

「大学生としての英語コミュニケーション力の基礎を身に付けながら、その学習過程で、大学生としての自覚を育み、教養を深めながら、客観的な分析態度に基づく批判的思考力などを養う。」

このように平成 28（2016）年度英語教育のリ・デザインと共に出来上がった共通教育に位置した新しい英語教育ミッションになった。つまり、教養教育という概念を維持しつつ 21 世紀に必要とされているスキルを入れながら、英語運用能力を伸ばす、という目標になっている。

このミッションを具体化・体系化するために、1 年次から 2 年次にかけて英語 IA・IIA、英語 IB・IIB、英語 III、と英語 IV という科目を開講している。これらすべての科目は専門的学修のための英語運用能力基礎力の養成として運用されている。

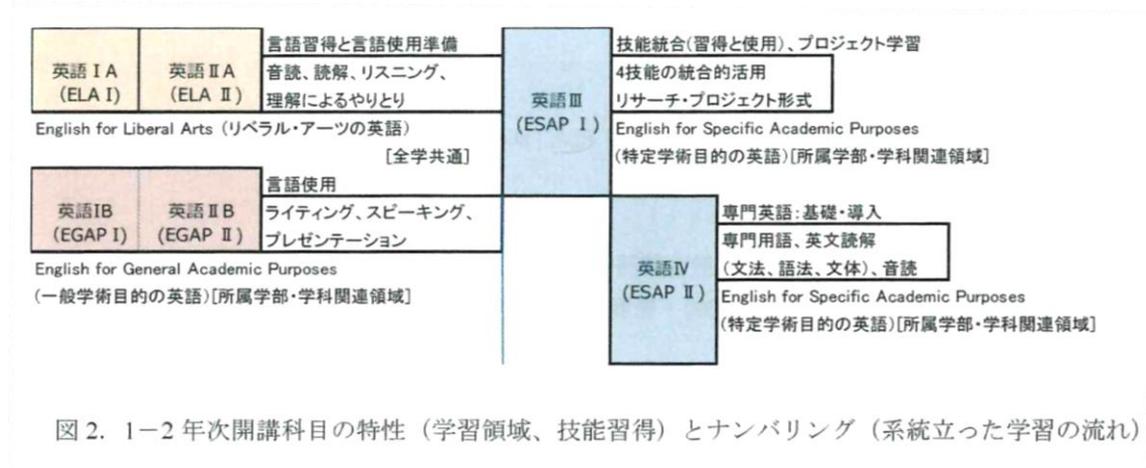
英語 IA と英語 IIA は、教養（英語で言うと、Liberal Arts）を念頭におきながら、主に読むことに焦点を当てた理解面の英語力を涵養する。英語 IB は、一般的な学術にかかる内容を吟味しながら、主に書くこと、英語 IIB は、一般的な学術にかかる内容を吟味しながら、主に話すことに焦点を当てた伝達面の英語力を涵養する。これで、インプットとアウトプットのバランスを生かしながら、1 年次の全学部生を対象に 1 週間に 2 回の英語授業を開講している。

2 年次前期に、5 学部の学生を対象に英語 III という科目を開いている。これは、1 年次で培った英語運用能力（英語コミュニケーション力）を応用する形で 4 技能を統合的に活用しながら、リサーチ・プロジェクト学習で学術目的の英語力を涵養する科目である。また、2 年次後期には学部の基礎的な専門英語を重視した英語 IV という科目を 3 学部対象に開講している。3 年次以降の学部内の専門英語教育への架け橋になると考えている。

図で表せば、共通教育英語は以下のように用意されている。

開講学期	1期		2期		3期		4期		5期		6期	
レベル	基礎（習得と使用：技能の連携）				応用（技能の統合）		発展（専門英語）		専門英語			
	1年次（必修）				2年次（選択）				3年次（選択）			
	前期		後期		前期		後期		前期		後期	
科目名 (ナンバリング)	英語 I A (ELA I)	上級 中級 初級	英語 II A (ELA II)	上級 中級 初級	英語 III (ESAP I)	上-中級 中-初級	英語 IV (ESAP II)		英語 V (ESP I)		英語 VI (ESP II)	
	英語 I B (EGAP I)	上級 中級 初級	英語 II B (EGAP II)	上級 中級 初級								
単位数	2	(1+1)	2	(1+1)	1		1		1		1	
累計	4		5		6		7		8			

図 1. H28 導入 共通教育英語カリキュラム (1—6 期：1—3 年次対象)



教育内容については、平成28(2016)年に英語WGにより発行された131ページに及ぶ「共通教育英語のリ・デザイン化：カリキュラムの実質化と英語授業の系統化」を参照した。

A-2 開講コマについて

令和2(2020)年度共通教育英語の開講コマ数は約267コマである。1年次の英語教育には214コマがあり、2年次には53コマがある。前期と後期に分ければ、前期に141コマ、後期には126コマが用意されている。これほどたくさんのコマを外国語教育部門で提供するのは一苦勞であるが、学生に教育の質を確保するのに必要なコマ数でもある。これぐらいの共通教育英語のコマ数はどうしても堅持する必要がある。

1年次に週2回、2年次に週1回というペースは英語基礎力の徹底的育成のための最低ラインになっている。これは、言うまでもなく、高校までの英語教育と比較して授業時間数が圧倒的に少なくなっているという事実ではあるが、現在大学が置かれている状況を考えれば、予算的にも人員的にもこれ以上共通教育英語では負担できないと考えている。しかし、学生が履修する英語コマ数が不足していることを認識する必要もある。例えば、グローバル化が進む前の時代の話だが、教養部廃止前の状況としては、全学部共通で英語8単位必修だったという時代もあった。

実は、現在の267コマは3年前の約301コマと比較して、3年でコマ数を10%以上削減している。3年連続10コマ以上を厳格にカットしている。これから削減できるコマがあれば、削減するつもりであるが、教育の質を保ちながらコマ数を減らすことは年々難しくなってきた。

削減できない理由として、クラスサイズを考えなければならないということである。現在、英語ⅠA・ⅠAには学生40人程度で授業が成り立っている。英語ⅠB・ⅠBはアウトプット中心となるので、35人程度のクラスサイズにしている。また、英語Ⅲでは同様の理由で、35人程度で授業を整備している。英語Ⅳはリーディング中心になっているので、また40

～45 人程度のクラスサイズにしている。英語 I～IV すべてのクラスサイズが理想的な数ではないが、今このクラスサイズでは授業運営（教授法の意味合いなどを含めて）が成り立っている。しかし、逆に予算が少し残っていれば、学生のため、そして教員のためにも英語クラスサイズを縮小すべきである。

また、コマ数と予算のことを考えれば、英語教育の一単位当たりの単価は悪くない。つまり、カリキュラム・マネジメントの面から言うと、共通教育英語を維持するためのコストは高くない。鹿児島大学トップセミナー（令和 2(2020)年 2 月 13 日開催）での説明があったように、学生一人当たり一単位のコストリカバリーが約 19,500 円になる。一つのクラスが 35～40 人だと設定して、共通教育英語専任教員の年間持ちコマ数を 11～12 コマにすれば、専任教員のコストリカバリーが良い方だと分かる。単純な計算により、専任教員給与の約 82,000,000 円（教授 3 人×9,000,000 円、准教授 5 人×7,000,000 円、講師・助教 4 人×5,000,000 円）に対してプログラムが得る授業料収入の合計が約 90,000,000 円になる。コストリカバリーは約 8,000,000 円プラスという計算で、プログラムがお金を稼いでいると考えても良い。これは外国語教育部門には若い助教と講師（と准教授）が割と多く所属しているからであると推定できる。

しかし、専任教員のコストが割安であるだけでなく、科目の約 40%を非常勤講師に担当してもらっているということも忘れてはいけない。非常勤講師に一コマ当たり約 170,000 円の支払いになっているが、一コマの授業料収入（19,500×35 人）が約 680,000 円になっている。専任教員と非常勤講師のコストリカバリーを合わせると、共通教育英語のプログラムがかなりの割安感があることは否定できない。単純な計算では、約 65,000,000 円のコストリカバリープラス（CR+）になる。

また、地方の国立大学 12 校を比較してみれば、鹿児島大学共通教育英語が高コストで環境に恵まれすぎている訳ではないと分かる。

第56回12大学教養教育実施組織代表者会議協議題

「教養教育における非常勤講師の現状と課題」

	鹿大	弘前	山形	茨城	埼玉	千葉	富山	信州	静岡	山口	愛媛	佐賀
英語												
専任教員数	12 学部13	23 学部含む	19 学部含む	12 学部14	5	25 学部含む	3	7	27 学部含む	3	19 特任含む	6
担当クラス数	124 学部23	93	50	124 学部28	112 Q制	200	20	?	115	45	259	57
平均受講人数	40	30	35	35-50	35	30	50	30-50	25-35	20-50	35	43
非常勤講師数	25	15	16	32	19	38	34?	37	62	18	4	14
担当クラス数	110	107	145	?	400 Q制	273	149?	230	216	216	7	84
平均受講人数	40	30	35	35-50	35	30	40?	30-50	25-35	20-50	35	39
初修語												
専任教員数	6	9 学部含む	17 学部含む	11 学部含む	3	9 学部含む	2	2	15 学部含む	0	7	X
担当クラス数	15	17	76	22	6	30	8	?	45	0	52	X
平均受講人数	24	10-40	30	10-30	20	50	30	25-40	35	--	60	X
非常勤講師数	9	13	20	26	24	45	?	8	27	12	9	X
担当クラス数	18	23	80	?	79	246	?	30	125	12	64	X
平均受講人数	36	10-40	30	10-30	20	50	?	25-40	35	30	60	X
予算												
非常勤手当額	2500万円	3000万円	4800万円	4800万円	8000万円	10000万円	3600万円	6000万円	?	4400万円	1200万円	1600万円

上記のデータが示すように、鹿児島大学の共通教育英語は茨城大学の状況とかなり似ている。しかし、鹿児島大学の方では学部所属教員の負担が一年2コマに統一されていない（令和2（2020）年度には平均1.7コマになっている）。実を言うと、茨城大学と同様に、原則2コマ担当に統一されるべきという声が以前から挙がっている。

鹿児島大学・茨城大学モデルの他、愛媛大学の例もある。愛媛では英語非常勤講師を極力減らして、特任英語教員（教員一人当たりの年間コマ数18～20コマ）を含めた専任19名にしている。このような制度なら、非常勤講師のコストを削減し、専任教員のコストを抑えながら、教育の質が確保できると思われる。

英語科目の平均受講人数の面から考えれば、12大学のデータが示す通り、鹿児島大学共通教育英語科目の平均受講人数は40名であり、12大学の平均37名より少し多くなっている。クラスサイズを今以上増やせば、教育の質・教育の内容が悪くなる恐れがある。

結果として、鹿児島大学では専任と非常勤の教員が適切な人数で必要最低限採用され、平

均受講人数も 40 名まで増やされたため、英語と初修語を合わせた年間 2500 万円の非常勤手当額が他大学の殆どと比べれば、割安感がある。どうしてもこの手当を減らす必要があれば、愛媛大学モデルが考えられると思う。

結論として、現カリキュラムの約 267 コマが必要の上、専任教員の 12 人分も必要である。カリキュラムの運営上・管理上の面から、専任がコマ数の約半数を受け持つ必要がある。良いことに、令和元 (2019) 年度からやっと専任が全体コマ数の半分を担当することになった。教育の質を保証するため、現状の全体コマ数と専任教員数を維持するのは最低限のラインになっている。

A-3 テキスト・教材について

平成 28 (2016) 年度導入の新カリキュラムは、共通教育の英語科目の位置付けを変え、それに伴い、推奨テキストの在り方も変わった。英語科目を ELA コース (英語 IA、IIB)、EGAP コース (英語 IB、IIB)、ESAP コース (英語 III、英語 IV)、ESP コース (英語 V、英語 VI) にわけた。ただし、共同獣医学部を除く。初年次は ELA コースと EGAP コースを開講し、1 年生の英語 ELA コース (英語 IA、IIB) では、音読、リーディング、リスニングに焦点が当てられ、全学部共通の推奨テキストとなった。上級から初級、基礎まで全部で 20 冊のテキストを選定し、サブテキストとして、リスニングに特化したものも加えられた。また、テキストの利用だけでなく、学習進度、学習意欲、授業活動、課題の取組み具合をもとに、独自の教材を活用することも認めた。基本的に前期と後期の 1 年間で共通の選定テキストを使用することを基本とした。前期と後期で担当教員が変わる場合、テキストの使用状況などを記した申し送り表を作成し、後期担当者に送ることとした。

EGAP コース (英語 IB、IIB) では、ライティング、スピーキング、プレゼンテーションに焦点が当てられ、①理学部・工学部・農学部・水産学部専用、②医学・歯学部専用、③法文学部・教育学部専用ごとに推奨テキストリストを作成した。平成 28 (2016) 年度版はカテゴリーごとに上級から初級、基礎まで全部で 20 冊前後のテキストをそれぞれ選定した。サブテキストとして、プレゼンテーションに特化したものを必携テキストとした。また ELA コースと同様に、テキストの利用だけでなく、学習進度、学習意欲、授業活動、課題の取組み具合をもとに、独自の教材を活用することも認めた。基本的に前期と後期の 1 年間で共通の選定テキストを使用することを基本とした。前期と後期で担当教員が変わる場合、テキストの使用状況などを記した申し送り表を作成し、後期担当者に送ることとした。

すなわち、ELA コースでは全学部共通推奨テキスト 1 冊に加え、教員によりリスニングに特化したテキストの 1~2 冊が、EGAP コースでは各カテゴリー別の推奨テキスト 1 冊に加え、プレゼンテーションに特化したテキスト 1 冊の計 2 冊を使用して授業をすることとした。

平成 28 (2016) 年度の前期が終わった 8 月には FD としてワークショップを開催し、テ

キストの使用方法や授業内容に関する意見交換が行われた。その意見を反映し、平成 29 (2017) 年度の共通教育の英語科目は教えるスキルと推奨テキストリストの見直しを行った。

平成 29 (2017) 年度の共通教育英語科目は前年のものを踏襲し、内容を部分的に変更した。ELA コース (英語 IA、IA) のリーディングはそのままとしたが、教える内容をリベラル・アーツの英語ということで、専門性の強いテキストを外し、一般的な広いトピックを扱うものに変更した。また、専門性の強いテキストは英語 IV の推奨テキストに入れることとした。EGAP コース (英語 IB、IIB) の英語 IB ではライティング、英語 IIB ではスピーキング/プレゼンテーションを教えることとし、推奨テキストリストも見直された。また、推奨テキストも旧カリキュラムのように冊数も増やした。

同時に、平成 29 (2017) 年度のから ESAP コース (英語 III、英語 IV) が始まるため、英語 III と英語 IV の推奨テキストリストの作成も行った。ただし、英語 III と英語 IV で使用するテキストに関しては、推奨テキストの利用は任意 (担当教員の判断) とし、独自の教材利用も可能とすることとした。また、全員 1 年次にプレゼンテーションの必携テキストを持っていることを前提とし、このテキストを繰り返し使用し、応用して授業をすることも提案されていた。

英語 IIB はスピーキング/プレゼンテーション、英語 III は 1 年次に学んだ技能統合の段階と位置づけ、学部や学生の専攻に焦点を当てたスピーキング/プレゼンテーションを扱うことになっていた。この両科目は似ているため 1 つの推奨テキストリストとしたが、推奨テキストリストを英語 IIB と英語 III で分けて欲しいとの要望があり、平成 30 (2018) 年度の推奨テキストリストから分けるとこととなった。

英語 IV では学部や学生の専攻に焦点を当てたリーディングに焦点を当てたテキストを選び、推奨テキストリストを作成した。また、先にも触れたように英語 IV の推奨テキストリストには、平成 28 (2016) 年度の英語 IA、IIA で使用した専門色の強いテキストが加えられたが、前年度に学習したテキストとの重なりを避けるため、平成 29 (2017) 年度はリストに加えないこととし、平成 30 (2018) 年度の推奨テキストリストから加えることとした。そのため、平成 29 (2017) 年度における英語 IV の推奨テキストリストは 17 冊のみとなった。

平成 30 (2018) 年度はシラバスの見直しを行ったが、それに伴う推奨テキストリストの大きな変更はなく、前年度を踏襲した。令和元 (2019) 年度の推奨テキストリストには、補助教材として e-learning 教材が加わった。具体的には、英語 IA と英語 IIA (リーディング) には Xreading の半年版と 1 年版が、英語 IIB (スピーキング/プレゼンテーション) には EnglishCentral をそれぞれ補助教材として加えられた。

これまで新刊のテキストには黄色いハイライトを付けた推奨テキストリストを配布してきたが、令和 2 年度向けの推奨テキストリストにはテキストの Edition が変わるものが多く含まれるため、緑のハイライトを付け、テキストを選ぶ際の参考にしてもらった。

このようにテキスト・教材は、アドミッション・ポリシーや中期計画に加え、英語ミーティングで英語シラバスの見直しを行い、英語教員の意見などを常に反映しながら、学生にとって最善なものをリスト化し、準備を行ってきている。

A-4 成績分布について

令和元（2019）年度に成績に関する申し合わせを外国語教育部門（英語）独自で作成することにした。共通教育英語での成績分布には乱れや偏りが見られるという指摘があった訳ではないが、GPA の導入などを考えて成績分布に注意を払うべきだと考えた。以下が英語担当教員全員に配る資料である。

鹿児島大学共通教育センター 外国教育部門(英語)	
成績に関する申し合わせ General Understanding about Grades	
共通教育センター英語科目（英語 IA/IIA、IB/IIB、III、IV）の各クラスの成績分布を下記のモデルを目安として考えています。	
We aim for the following grade distribution with General Education Center English classes (English IA/IIA, IB/IIB, III, IV).	
評点	成績分布
100-90	0-20%
89-80	10-40%
79-70	10-40%
69-60	10-40%
59-0	0-20%
*受験資格がない学生（欠席が多いなどの場合）は含まない。	
*習熟度別クラスを実施しているので、全てのレベルにこのモデルを機械的に当てはまるわけではない。	

英語ミーティングで申し合わせを決めてから一年しか経っていないので、どのような効果があるか判断材料にはならないが、申し合わせがないよりは良い結果になっていると考えている。しかし、資料に記されている通り、習熟度別クラスを実施しているので、すべてのレベルにこのモデルが機械的に当てはまるわけではない。

A-5 習熟度別クラスの運用について

鹿児島大学の共通教育英語は2008年度から現在に至る全学規模での習熟度別クラス編成で行われている。殆どの学生が大学入試センター試験を受験しているため、センター試験英語のスコアを利用し、初級（h レベル）、中級（p レベル）、と上級（v レベル）の三つの級に分けられて、授業を設けている。更に、一部の学部では上級プラス（v0 レベル）及び・又は初級の基礎（h3～h6 レベル）のクラスを設けている。センター入試を受けていない日本人新入生は、初級（h レベル）または初級の基礎（h3～h6 レベル）に配属されている。また、センター入試を受けていない留学生のため、授業が始まる直前に文法中心のプレイズメントテストが実施され、適切なレベルのクラスに配属されている。（但し、令和2（2020）年度入学の留学生に関して、新型コロナウイルスの影響によりオンラインで実施している EF SET 外部試験をプレイズメントとして使用した。）習熟度別クラス編成によって、学生一人一人に合った英語教育を実施している。共通教育センターの履修案内では学生にも習熟度別クラス編成という制度を紹介している。

A-6 授業での挑戦について：速読、多読、多聴

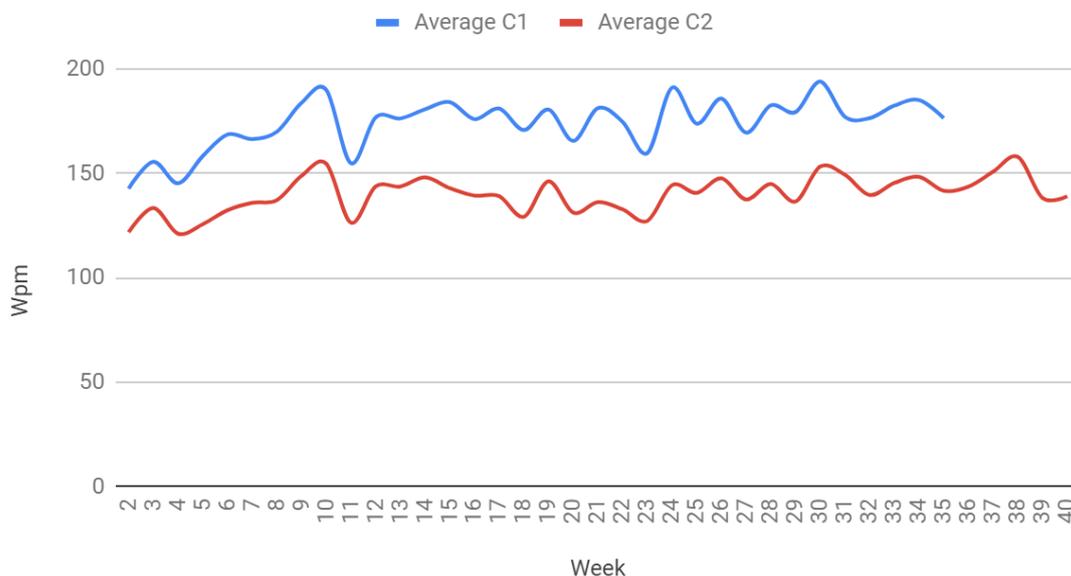
英語読解は鹿児島大学共通教育センター英語プログラムにおいて大変大きな役割を果たしている。1年生対象の英語授業では前期・後期2コマずつ、一年に合わせて4コマを占め、2年生対象の授業でも、プロジェクト学習、研究発表の準備段階において重要な役割を担っている。しかし、学生の学力低下が著しい中、週90分の授業内で指導できる内容や量が限られているため、読解促進や授業外学習を促す活動が必要と判断した専任教員数人で試験的に様々な活動を行った。以下にその中の三つ（速読、多読、多聴）を紹介する。

1. 速読の試験的实施

平均的なネイティブ・スピーカーの読解速度は300wpm（1分間の速度）とされるが、鹿児島大学の1年生の英語読解速度は50から100wpmです。速度が非常に遅いと一文を読み終わる前に読んだ内容を忘れてしまう、全体像が全く掴めないなどの問題が起こる。そのため、英語に対する苦手意識がさらに高まり、モチベーションがさらに低くなるという負の連鎖に陥るケースも少なくない。

この問題を解決するためにまず読解速度を上げる必要があると考え、令和元（2019）年度のいくつかの英語 IA・IIA の授業で速読の試験的な実施が行われた。その結果、対象学生の読解速度が上がり、それに伴って理解度も伸びた。

Average reading rates C1 & C2 (one year)



上記のグラフから分かるように、1年間速度の訓練を行った2クラス(C1、C2)とも速度が上昇した。読解速度と理解度の関係を調べたところ、前期では速度が上がるにつれ理解度も上がったという結果になった。後期では、C1クラスでのみ同じような関連性が見られ、C1より最初から英語レベルが低かったC2ではそれはなかった。つまり、英語のレベルが低いクラスでは無理して早く読むと理解度が落ちるといった逆効果を生み出す可能性もあるが、レベルが高いクラスにおいては速度を上げた方が理解度も上がる。

また、この訓練は全学生が期末に受けたG-TECのスコアにも影響があった可能性が示唆された。速読訓練を受けたクラスの平均スコアが統計的に有意な差で他の学生より高く、リーディングにおいて前期では10-15点、後期では13-24点で上回った。

G-TEC スコア	リーディング	全学生	リスニング	全学生
前期-C1	121.5	106.68	131.03	112.14
前期-C2	116.92	106.68	121.28	112.14
後期-C1	128	103.91	129.62	104.71
後期-C2	117.31	103.91	114.36	104.71

上の結果を踏まえ、この実験的な実施が成功したと言える。また、学生からも新しい取り組みとして人気があり、読解力が伸びた実感がするというアンケートによるコメントが多数見られ、有意義な活動であると思われる。

2. Xreading の試験的導入

令和元（2019）年度、学生の読解力を高める取り組みとして、多読を促すオンラインシステムの導入も行った。週に90分の英語の授業だけでは言語理解・運営能力を高めることが極めて困難である。そのため、授業外でインプットを増やすことが不可欠である。多読には沢山のメリットがあり、自主性を高める、理解できるインプットを提供する、総合的な言語運営能力を高める、一般知識を増やす、語彙を増やす、文章能力を高める、モチベーションの向上につながるなどがある。

Xreading とは、日本で英語講師として活躍しているネイティブの先生が手がけるオンラインの多読ツールである。6か月から1年間の多読期間内で学生は自身の英語能力に合う本を好きなだけ読める仕組みである。先生はクラス内の全ての学生の進捗状況を把握でき、目標などの設定を事由に変えられる。

令和元（2019）年度は合計15クラスでこのシステムを実験的に導入し、以下に責任者となったハムチェック・モニカが担当した6クラスの結果を紹介する。塾度別にクラス分けされた学生には、一学期に4万から6万語文の本を読む課題が課せられ、その達成度によって成績の一部に影響が出た。多読のすべてが宿題で、システムの利用法以外は授業中に時間を割けなかった。その結果、1年生の場合は、読解速度が17%～30%上昇し、理解度は2%～19%まで上がった。また、2年生のクラスではこれを上回る結果となった。読解速度が54%～63%上昇し、理解度は20%～36%向上した。英語レベルが低いhクラスにおいて上昇幅が一番高く、この活動は最も効果的であったと言える。

		本数	語数	本レベル	速度 wpm	クイズ成績
4月	平均	11	8086	3	68	64
	合計	411	315366			
5月	平均	19	16,980	3	90	77
	合計	738	645,254			
6月	平均	24	26,649	4	99	76
	合計	948	1,039,304			
7月	平均	30	37,472	4	111	77
	合計	1,066	1,311,533			

例えば、上記の h レベルのグループにおいて、4 月と比べて 7 月末では読解速度が 63%上昇し、理解度は 20%向上した。

これらの活動の取り組みに協力した教員や参加した学生を対象に簡単なアンケートも行われた。多くの参加学生はこのような活動の意義に対して肯定的だった一方、宿題の量が増えて負担になるという意見も多少見られた。教員からも学生の負担になっているのではと心配する声があったが、同時に学生の読解力及び表現力が確実に上がったと評価した。

3. EnglishCentral 試験的導入の報告

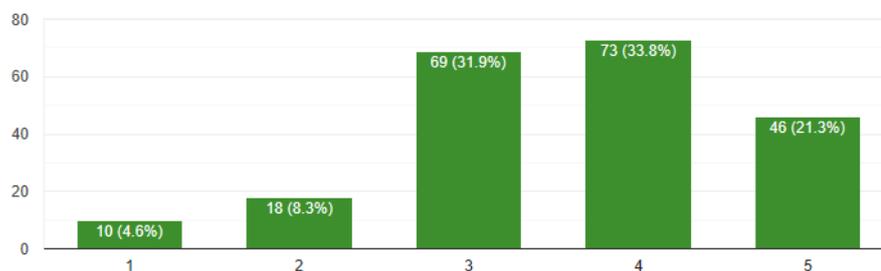
EnglishCentral は、2014 年の新カリキュラム導入に至るまで、共通教育で提供する様々な英語の授業で活用されてきた。2014 年度以降は、EnglishCentral のプログラム内容と学術英語を基本とする新カリキュラムの内容に隔たりがあることから、本学での EnglishCentral の使用は見送られていたが、今回、新たに、カリキュラム内での学生の自主学习、e-learning としての EnglishCentral の活用を検討するため、3 名の常勤教員によって、令和元（2019）年度後期の英語コース（English IIA, English IIB, English IV）で再度 EnglishCentral が試験導入された。試験導入は計 4 クラス、310 名の学生を対象に行われた。導入にあたって、学生は 15 週に渡って毎週 2.5 時間の自主学习をすることで、最終的な学習評価の 20%から 30%の割合の成績を付与された。

以下は、学期末に Google Forms を利用して行われたアンケートの結果である。EnglishCentral を使用した計 310 名の学生のうち、216 名の学生がアンケートに回答した。

(1) EnglishCentral を使用しての学習を楽しむ事ができましたか。

I enjoy studying English on EnglishCentral.

216 responses

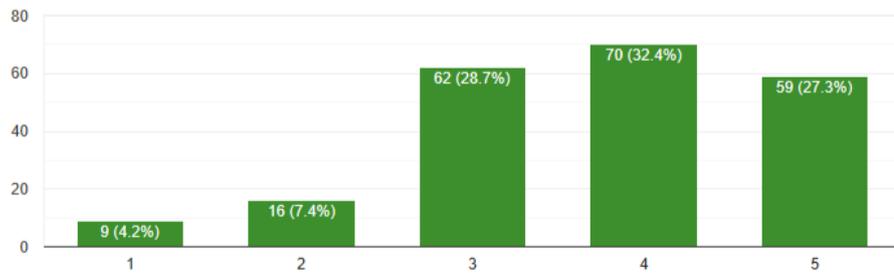


(5 = とてもそう思う、4 = かなりそう思う、3 = どちらとも言えない、2 = あまりそう思わない、1 = とてもそう思わない)

(2) EnglishCentral の利用は簡単でしたか。

It was easy to use EnglishCentral.

216 responses

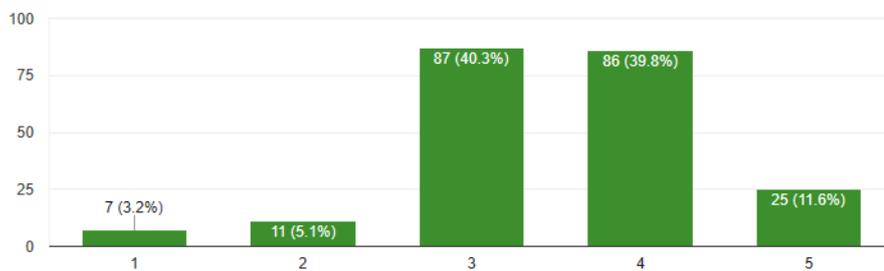


(5 = とてもそう思う、4 = かなりそう思う、3 = どちらとも言えない、2 = あまりそう思わない、1 = とてもそう思わない)

(3) EnglishCentral を利用したことで、英語の力が伸びたと思いますか。

EnglishCentral helped to improve my English.

216 responses



(5 = とてもそう思う、4 = かなりそう思う、3 = どちらとも言えない、2 = あまりそう思わない、1 = とてもそう思わない)

(4) とてもそう思う又はかなりそう思う、と答えた人は、どうしてそう思うのか理由を教えてください。

If you answered Strongly Agree or Agree for question 5, could you let us know how it was helpful?

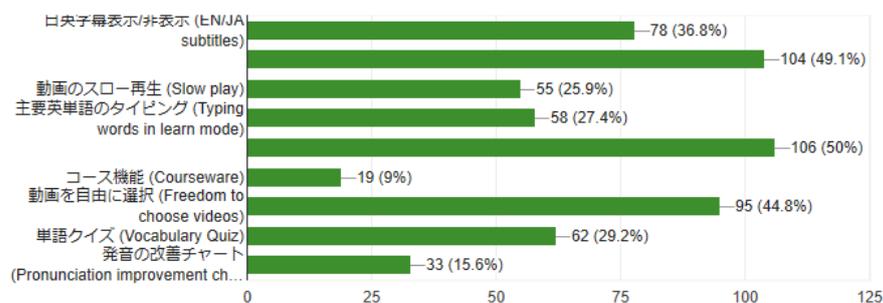
96 responses

生の英語に触れられるから
たくさんの動画の中から興味のある動画を選んで観れる点。
日本語訳モデルためわかりやすい
音読機能があつてよりネイティブに近い発音が出来た点
ネイティブな発音を真似することでリズム感が少し着いてきた気がするため。
正しい発音をより意識しながら発音することができる点
気軽にネイティブの発音を沢山聞けたから
発音の採点があること。
知らない単語を学べ、発音練習も捗った

(5) どの機能が英語力を改善するために役立ったと思いますか。

What feature(s) helped you improve your English?

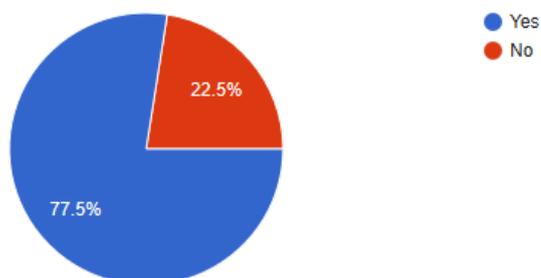
212 responses



(6) 他の学生に EnglishCentral を薦めたいと思いますか。

Is EnglishCentral something you would recommend other students to use?

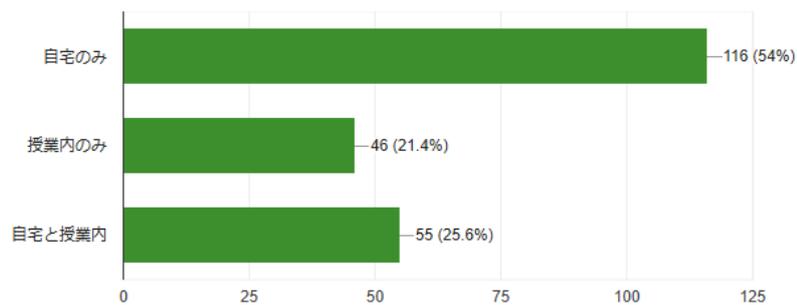
213 responses



(7) EnglishCentral に取り組む際、自宅で取り組むのと、授業中に取り組むのでは、どちらが良いですか。

Would you prefer to do EnglishCentral in class or at home?

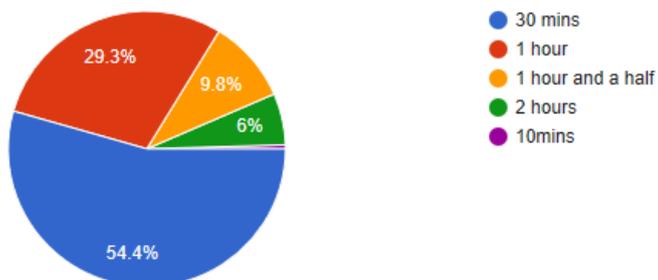
215 responses



(8) 一度にどのくらいの時間取り組みましたか。

How long do you do EnglishCentral at one time?

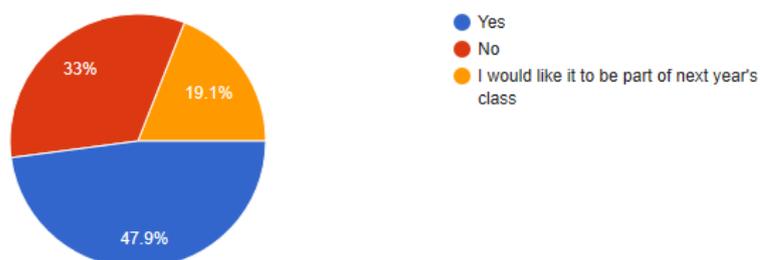
215 responses



(9) この授業が終わった後も、継続して EnglishCentral を利用したいと思いませんか。

Do you want to continue using EC after this semester ends?

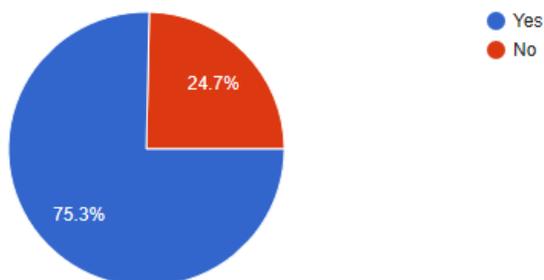
215 responses



(10) EnglishCentral を利用したことが、英語学習のモチベーションアップにつながりましたか。

Did EnglishCentral increase your motivation to study English?

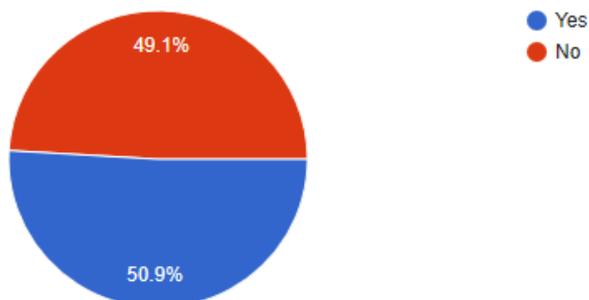
215 responses



(11) EnglishCentral の使用は語彙力の向上につながると思いませんか。

Did/Will EnglishCentral improve your vocabulary skills?

216 responses



(1 2) そう思うと答えた人は、どうしてそう思うのか、理由を教えてください。

If you choose Yes, how did it improve your vocabulary skills?

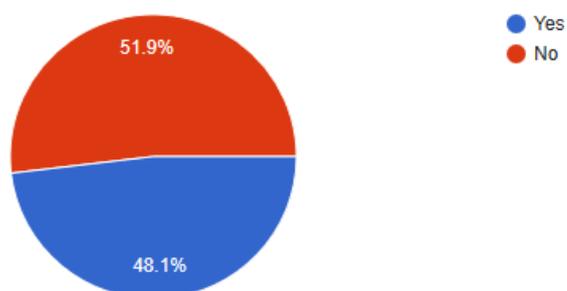
65 responses

忘れていた単語を思い出した
そこまでたくさんは伸びていないが、確実に少しは伸びている
わからない
英検準一級レベルの単語を身につけるくらいまで伸ばしたい。
知らない単語を覚えることができた
さまざまなジャンルの知らない単語が身につく。
海外で多少会話できるくらい
知らない単語の発音の確認など
わからない単語がわかるくらい

(1 3) EnglishCentral の使用は Speaking 力の向上につながると思えますか。

Did/Will EnglishCentral improve your speaking skills?

214 responses



(1 4) そう思うと答えた人は、どうしてそう思うのか、理由を教えてください。

If you choose Yes, how did it improve your speaking skills?

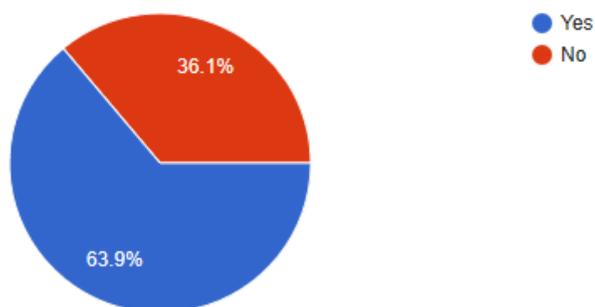
71 responses

英語の発話の特徴
滑らかな発音ができるようになった
発音はわからないが、リズム感は向上したように感じる。
正しい発音、アクセントを意識しながら読むことを何回も繰り返し行うことで伸びた
採点されることで、もっといい点数を出そうとして、何回も繰り返すこと。
強弱や抑揚をつけられるようになった。
単語を読むだけでなく文章を滑らかに読むようになった
発音が良くなった気がする
文中でどこで区切るか、またイントネーションをどこに置くかなどを意識して学ぶことが出来たから

(15) EnglishCentral の使用は Listening 力の向上につながると思いませんか。

Did/Will EnglishCentral improve your listening skills?

216 responses



(16) そう思うと答えた人は、どうしてそう思うのか、理由を教えてください。

If you choose Yes, how did it improve your listening skills?

88 responses

ネイティブの発音もわかるようになった。

難しい(聞き取りにくい)単語と易しい単語を聞き分けられるようになった

かなり。

知っている単語ならほぼ一回で聞き取れた。

英語が聞き取りやすくなった

本場のネイティブの発音に沿って練習できた。

映画とは違った短い動画の中で英語脳に切り替えることが出来たから

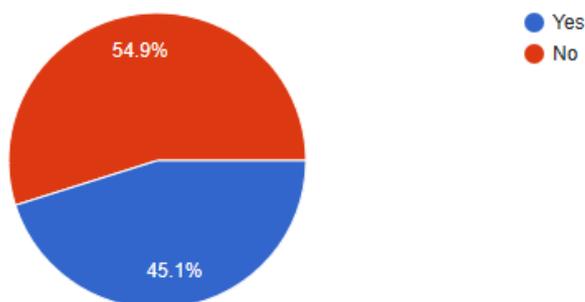
ディクテーションの力。

いろいろな種類の動画があるから

(17) EnglishCentral の使用は発音の向上につながると思えますか。

Did/Will EnglishCentral improve your pronunciation skills?

215 responses



(18) そう思うと答えた人は、どうしてそう思うのか、理由を教えてください。

If you choose Yes, how did it improve your pronunciation skills?

64 responses

ネイティブの発音に近づいたり、イントネーションも覚えた。
悪かったところが改善されるので良くなったと思う。
使わないよりはましというくらい。
始める前よりも少し
滑らかにつながって読めるようになった
聞き取れるくらいに
特にrの発音などが楽にできるようになったから
ちょっとだけ。
発音採点があっちはじめにくらべて合格率が上がった

上記の結果の通り、多くの学生が EnglishCentral の使用に対して好意的な印象を持っていることが明らかになった。2014 年度以降、EnglishCentral には様々な機能が追加されているが、特にスマートフォンやタブレット用のアプリケーションが提供されたことで、学生にとってはより学習に取り組みやすい環境が整えられたと言える。これによって、自宅にコンピューターを所有していない学生や、インターネット環境が整っていない学生が、大学のコンピュータールームで課題に取り組まなくてはならない問題などが解決された。また、最初に行わなくてはならない新規登録やクラス登録の作業も大幅に簡略化され、教員にとってもシステム導入への負担が軽減されたと言える。

アンケートの結果は概ね好評で、多くの学生が EnglishCentral の効果を実感していることから、EnglishCentral の導入を前向きに検討して良いと考えられる。一学期間の試験導入を経て明らかになったことは、学生の英語学習への取り組みに良い影響を与えるには、EnglishCentral というプログラムそのものの効果も大きいですが、これに併せて教員の学習支援が不可欠であるという事である。具体的には、教員が学生の取り組み状況を毎週確認し、取り組み状況が良好な学生を称賛することでさらなる学習を促し、取り組み状況が芳しくない学生には激励の言葉をかける事で、学生のモチベーションを維持する事が必要である。

今回の調査では、EnglishCentral を使用した全クラスで統一されたアンケート調査を行い、包括的なデータを分析したが、学部間や学生のレベルによって学生の反応は異なる事が予想される。よって、今後の展望としては、学部別やレベル別にさらに詳しい調査を行い、本学での e-learning の導入に EnglishCentral の使用が適しているか、その効果を検証していく必要がある。

B. アンケート結果について

現在のグローバル化した世界の中で、英語力は必要なものであり、学生がコミュニケーション能力を生かし、社会に貢献できるような人材の育成を目指すことが重要である。共通教育センター英語部門の教員 12 名一人一人が英語教育体制を充実し、学生の英語力の向上に向けて、全力で活動している。学生のアンケート調査の分析により英語の授業が高く評価されており、英語部門の先生全員が十分に役割を果たし、専門的な知識と教授法による効果が現れている。また、アンケート調査の分析で、4 技能の SPEAKING, WRITING, LISTENING と READING の力が上がっている傾向が見られる。

B-1. 共通教育科目授業改善に資するアンケートについて

共通教育科目授業改善に資するアンケート（これから、授業アンケート）の結果から英語教育が確認できる。平成 29（2017）年度に外国語の授業アンケートが実施されなかったため、平成 30（2018）年度と令和元（2019）年度の結果に絞る。

まず、平成 30（2018）年度前期の結果を見る。英語の欄には英語 I と英語 II が記されているが、獣医学部だけの授業なので、説明から省く。また、英語 IV が再履修生だけのための科目なので、今回これも省く。新カリキュラムの英語 IA、英語 IB、と英語 III の結果が説明の中心になる。

科目名	授業満足度					授業外学習時間								
	非常に良かった	おおむね良かった	普通	あまり良くなかった	かなり良くなかった	全くしなかった	30分未満	30分～1時間	1時間～2時間	2時間～3時間	3時間～4時間	4時間～5時間	5時間以上	
英語	36.7%	41.3%	18.5%	3.0%	0.5%	5.1%	20.2%	39.2%	27.8%	5.7%	1.3%	0.3%	0.5%	
英語 IA	39.1%	40.5%	17.6%	2.6%	0.2%	5.3%	24.4%	39.3%	24.9%	4.4%	1.1%	0.1%	0.5%	
英語 IB	36.4%	41.5%	18.8%	2.9%	0.4%	4.9%	15.9%	39.6%	31.5%	6.0%	1.3%	0.2%	0.6%	
英語 III	32.2%	42.7%	19.7%	4.0%	1.3%	4.8%	20.4%	37.4%	26.2%	8.3%	1.8%	0.7%	0.3%	

平成 30 年（2018）度前期共通教育科目授業改善に資するアンケート結果（一部抜粋）

この英語 IA、英語 IB、と英語 III の結果はどれも良い、又は場合によって優れている。学生の授業満足度に関して、約 75～80%の学生が「非常に良かった」か「おおむね良かった」と答えた。共通教育の他の科目と比較すれば、良い方にある。また、授業に満足していないと回答した学生も少ない。特に、「初年次セミナーⅠ」と「大学と地域」という科目と比べれば、上出来であると分かる。授業外学習時間の比較でも、英語が単位の実質化を守っていることが分かる。一つの授業に 1 時間の授業外学習時間が英語科目の規則になっているが、共通教育センターでは単位制度に沿う科目は英語ぐらいである。しかし、この結果を見極めて、令和元（2019）年度の授業外学習時間を更に増やすことを決めた。

平成30年度前期 共通教育科目授業改善に資するアンケート結果											H30.8.24					
科目名	受講者数	回答者数	回答率	授業満足度			授業外学習時間									
				非常に良かった	おおむね良かった	普通	あまり良くなかった	かなり良くなかった	全くしなかった	30分未満	30分～1時間	1時間～2時間	2時間～3時間	3時間～4時間	4時間～5時間	5時間以上
初年度セミナー	1996	1508	75.6%	22.3%	36.3%	27.7%	8.0%	5.7%	8.2%	24.1%	34.7%	23.2%	6.4%	1.9%	0.5%	1.1%
大学と地域	1112	783	70.4%	20.9%	38.6%	29.6%	7.4%	3.4%	68.2%	21.3%	8.0%	1.9%	0.4%	0.0%	0.0%	0.1%
体育・健康(理論)	1127	732	65.0%	28.3%	40.4%	24.6%	5.2%	1.5%	50.1%	32.8%	12.8%	3.3%	0.3%	0.4%	0.0%	0.3%
体育・健康(実習)	1033	649	62.8%	44.7%	36.7%	16.0%	1.8%	0.8%	49.5%	25.3%	17.3%	6.2%	0.9%	0.0%	0.3%	0.6%
情報活用	2003	1414	70.6%	31.8%	43.7%	21.1%	2.7%	0.7%	31.2%	33.7%	23.3%	9.3%	2.1%	0.3%	0.1%	0.3%
英語	5267	3406	64.7%	36.7%	41.3%	18.5%	3.0%	0.5%	5.1%	20.2%	39.2%	27.8%	5.7%	1.3%	0.3%	0.5%
英語 I A	1969	1424	72.3%	39.1%	40.5%	17.6%	2.6%	0.2%	5.3%	24.4%	39.3%	24.9%	4.4%	1.1%	0.1%	0.5%
英語 I B	1983	1359	68.5%	36.4%	41.5%	18.8%	2.9%	0.4%	4.9%	15.9%	39.6%	31.5%	6.0%	1.3%	0.2%	0.6%
英語 I	32	14	43.8%	28.6%	28.6%	14.3%	0.0%	0.0%	7.1%	7.1%	57.1%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
英語 II	31	1	3.2%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
英語 II	1240	599	48.3%	32.2%	42.7%	19.7%	4.0%	1.3%	4.8%	20.4%	37.4%	26.2%	8.3%	1.8%	0.7%	0.3%
英語 IV	12	9	75.0%	22.2%	44.4%	22.2%	11.1%	0.0%	11.1%	22.2%	44.4%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
異文化理解	2015	1383	68.6%	34.8%	43.0%	19.1%	2.2%	0.9%	41.9%	35.4%	16.0%	5.1%	0.9%	0.1%	0.1%	0.4%
初級外国語	773	539	69.7%	47.9%	36.0%	12.2%	3.2%	0.7%	5.4%	23.4%	39.7%	22.1%	7.8%	1.1%	0.2%	0.4%
初級独語 I	147	99	67.3%	58.6%	34.3%	7.1%	0.0%	0.0%	1.0%	24.2%	36.4%	22.2%	12.1%	3.0%	0.0%	0.0%
初級仏語 I	116	72	62.1%	40.3%	36.1%	19.4%	4.2%	0.0%	8.3%	23.6%	37.5%	22.2%	8.3%	0.0%	0.0%	0.0%
初級中国語	323	236	73.1%	37.7%	40.7%	14.4%	5.5%	1.7%	8.5%	31.4%	38.1%	18.2%	3.0%	0.0%	0.4%	0.4%
初級韓国語	164	122	74.4%	59.8%	30.3%	9.0%	0.8%	0.0%	0.0%	7.4%	48.4%	27.9%	12.3%	2.5%	0.0%	0.8%
中級独語A・中級韓国語A	23	10	43.5%	90.0%	10.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%	20.0%	20.0%	30.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%
人文・社会科学(選択科目)	2604	1404	53.9%	44.2%	37.5%	14.5%	2.4%	1.4%	36.5%	32.6%	19.4%	8.5%	2.0%	0.4%	0.2%	0.2%
実験科目	1429	766	53.6%	33.3%	36.0%	24.0%	5.5%	1.2%	27.4%	16.1%	14.5%	19.7%	14.9%	5.4%	1.4%	0.7%
基礎物理学実験	505	273	54.1%	20.5%	41.0%	28.6%	8.1%	1.8%	4.8%	11.4%	13.6%	27.5%	24.9%	13.2%	3.7%	1.1%
基礎化学実験	384	177	46.1%	29.4%	37.9%	26.0%	5.6%	1.1%	6.2%	11.3%	20.3%	34.5%	23.7%	2.3%	0.6%	1.1%
基礎生命科学実験	338	184	54.4%	44.0%	30.4%	19.6%	4.9%	1.1%	6.6%	20.7%	8.2%	3.3%	1.1%	0.5%	0.0%	0.0%
基礎化学実験	202	132	65.3%	50.0%	31.1%	18.2%	0.8%	0.0%	48.5%	25.8%	17.4%	6.8%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%
自然科学(選択科目)	2217	1387	62.6%	33.4%	40.7%	22.0%	3.0%	0.9%	44.6%	32.9%	15.7%	5.6%	0.6%	0.1%	0.1%	0.3%
基礎教育入門	1366	704	51.5%	18.2%	37.2%	33.7%	8.4%	2.6%	15.2%	28.3%	31.8%	18.8%	4.3%	1.0%	0.0%	0.7%
基礎数学入門	195	85	43.6%	25.9%	31.8%	25.9%	9.4%	7.1%	11.8%	12.9%	31.8%	32.9%	8.2%	1.2%	0.0%	1.2%
基礎統計学入門	654	284	43.4%	10.2%	32.4%	45.1%	9.2%	3.2%	15.8%	29.2%	37.0%	14.1%	3.2%	0.0%	0.0%	0.7%
基礎物理学入門	152	88	57.9%	36.4%	36.4%	19.3%	8.0%	0.0%	8.0%	23.9%	33.0%	27.3%	5.7%	1.1%	0.0%	1.1%
基礎生物学入門	179	127	70.9%	20.5%	45.7%	27.6%	4.7%	1.6%	26.0%	37.0%	22.0%	11.8%	2.4%	0.8%	0.0%	0.0%
基礎化学入門A	81	49	60.5%	12.2%	46.9%	34.7%	4.1%	2.0%	10.2%	22.4%	34.7%	24.5%	6.1%	0.0%	0.0%	2.0%
基礎化学入門B	105	71	67.6%	18.3%	42.3%	25.4%	14.1%	0.0%	9.9%	36.6%	25.4%	18.3%	4.2%	5.6%	0.0%	0.0%
統合 I	859	495	57.6%	37.0%	39.2%	20.2%	2.4%	1.2%	50.5%	30.7%	13.5%	4.6%	0.4%	0.0%	0.0%	0.2%
統合 II	1285	668	52.0%	39.8%	39.8%	17.4%	2.7%	0.3%	46.6%	31.9%	16.8%	3.3%	1.0%	0.0%	0.0%	0.4%
日本語・日本事情科目	90	57	63.3%	63.2%	33.3%	3.5%	0.0%	0.0%	7.0%	22.8%	29.8%	29.8%	5.3%	5.3%	0.0%	0.0%
学芸員資格科目	287	133	46.3%	39.8%	33.8%	21.8%	3.8%	0.8%	20.3%	37.6%	31.6%	9.0%	1.5%	0.0%	0.0%	0.0%
合計	25463	16028	62.9%	34.0%	39.6%	21.0%	3.9%	1.5%	28.8%	27.3%	24.7%	14.0%	3.6%	0.9%	0.2%	0.5%

科目名	授業満足度				授業外学習時間											
	非常に良かった	おおむね良かった	あまり良くなかった	かなり良くなかった	全くしない	30分未満	30分～1時間	1時間～1時間30分	1時間30分～2時間	2時間～2時間30分	2時間30分～3時間	3時間～3時間30分	3時間30分～4時間	4時間以上	4時間以上	
英語	38.9%	53.2%	6.1%	1.9%	4.9%	22.7%	40.6%	20.6%	6.5%	2.7%	0.9%	0.4%	0.1%	17	0.6%	
英語ⅡA	40.5%	52.8%	5.6%	1.1%	4.3%	20.9%	40.2%	21.3%	7.8%	3.2%	0.4%	0.6%	0.2%	11	1.0%	
英語ⅡB	38.6%	53.1%	6.0%	2.3%	6.1%	23.6%	40.6%	19.7%	5.9%	2.4%	1.4%	0.2%	0.0%	1	0.1%	
英語Ⅳ	34.9%	55.4%	7.2%	2.6%	3.9%	24.2%	41.7%	21.4%	4.6%	2.0%	1.3%	0.2%	0.0%	4	0.7%	

平成 30 年（2018）度後期共通教育科目授業改善に資するアンケート結果（一部抜粋）

平成 30（2018）年度後期にあった英語ⅡA、英語ⅡB、と英語Ⅳの結果を見てみよう（英語Ⅰ、英語Ⅱ、と英語Ⅲの説明は省く）。英語ⅡA、英語ⅡB、と英語Ⅳの授業満足度に関して、「非常に良かった」か「おおむね良かった」と回答した学生の割合が90%を超えた。とても良い結果である。授業に満足していないと回答した学生も前期と同様に少ない。また、授業外学習時間も平均1時間程度になっているという計算ができる。授業満足度と授業外学習時間が両方とも上出来の結果になっているのはまた英語ぐらいである。

また、前期と後期をとおして見てみると、共通教育の英語(全科目)は、学生の満足度が後期になるにつれ高くなっており評価に値するといえる（「非常に良かった・おおむね良かった」前期：78.0% / 後期：92.1%）。また、標準としている週1時間の授業外学習時間は前期から後期にかけて大幅な減少はなく、大体維持されており、「30分～2時間」前期：67.0%・後期：67.7% / 「1時間～2時間」前期：27.8%・後期：27.1%）1年を通して学生の授業外学習への取り組みが比較的安定していたと言える。

平成30年度後期 共通教育科目授業改善に資するアンケート結果

2019.3.13

科目名	授業満足度				授業外学習時間										
	回答数	回答率	非常に良かった	おおよそ良かった	あまり良くなかった	かなり良くなかった	全くない	30分~1時間	1時間~1時間30分	1時間30分~2時間	2時間~2時間30分	2時間30分~3時間	3時間~3時間30分	3時間30分~4時間	4時間以上
			良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった	良かった
初年次ゼミナー II	2018	1007	53.9%	23.1%	53.5%	15.8%	7.5%	8.2%	34.7%	17.8%	7.8%	2.5%	1.1%	0.7%	0.5%
大学と地域	914	495	54.2%	27.8%	56.8%	11.5%	3.8%	66.5%	5.3%	1.2%	0.6%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%
体育(健康理論)	910	351	38.6%	38.7%	54.7%	4.6%	2.0%	46.4%	15.1%	4.3%	0.9%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%
体育(健康実習)	1065	431	40.5%	55.7%	41.1%	2.1%	1.2%	41.3%	18.8%	6.0%	1.4%	0.9%	0.2%	0.0%	0.5%
英語	4854	2741	56.5%	38.8%	53.2%	6.1%	1.9%	4.9%	40.6%	20.6%	6.5%	2.7%	0.9%	0.4%	0.6%
英語ⅠA	1959	1134	57.9%	40.5%	52.8%	5.8%	1.1%	4.3%	40.2%	21.3%	7.8%	3.2%	0.4%	0.6%	1.0%
英語ⅠB	1978	1027	51.9%	38.8%	53.1%	6.0%	2.3%	6.1%	40.8%	19.7%	5.9%	2.4%	1.4%	0.2%	0.1%
英語Ⅰ	32	14	43.8%	42.9%	57.1%	0.0%	0.0%	7.1%	42.9%	14.3%	14.3%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%
英語Ⅱ	30	10	33.3%	80.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	60.0%	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.0%
英語Ⅲ	42	14	33.3%	50.0%	35.7%	7.1%	7.1%	0.0%	35.7%	30.0%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
英語Ⅳ	813	542	66.7%	34.9%	55.4%	7.2%	2.8%	3.9%	24.2%	41.7%	21.4%	4.6%	2.0%	1.3%	0.7%
初級外国語	566	257	45.4%	54.1%	40.5%	3.9%	1.8%	4.3%	20.6%	41.2%	21.4%	7.4%	3.5%	0.4%	0.0%
初級英語Ⅱ	119	51	42.9%	62.7%	35.3%	2.0%	0.0%	5.9%	11.8%	37.3%	29.4%	7.8%	0.0%	0.0%	0.0%
初級英語Ⅰ	35	5	14.3%	60.0%	20.0%	20.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
初級仏語Ⅱ	71	19	26.8%	57.9%	42.1%	0.0%	0.0%	0.0%	5.3%	47.4%	26.3%	21.1%	0.0%	0.0%	0.0%
初級中国語Ⅱ	220	109	49.5%	33.0%	57.8%	6.4%	2.8%	7.3%	33.0%	42.2%	13.8%	3.7%	0.0%	0.0%	0.0%
初級韓国語Ⅱ	108	71	65.7%	77.5%	19.7%	1.4%	1.4%	0.0%	5.6%	45.1%	28.2%	9.9%	7.0%	1.4%	2.8%
中級英語B-中級韓国語B	13	2	15.4%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%
人文・社会科学(選択科目)	1867	676	36.2%	51.0%	42.8%	5.2%	1.2%	33.7%	32.5%	20.3%	10.1%	2.1%	0.8%	0.4%	0.3%
実験科目	545	170	31.2%	30.8%	61.2%	7.1%	1.2%	29.4%	16.5%	14.1%	16.5%	10.8%	7.1%	3.5%	0.8%
基礎物理学実験	188	61	32.4%	19.7%	65.8%	11.5%	3.3%	11.5%	16.4%	21.3%	23.0%	4.9%	13.1%	6.6%	1.6%
基礎化学実験	135	44	32.6%	27.3%	70.5%	2.3%	0.0%	9.1%	11.4%	9.1%	20.5%	31.8%	9.1%	4.5%	2.3%
基礎生命科学実験	145	37	25.5%	35.1%	54.1%	10.8%	0.0%	73.0%	10.8%	13.5%	0.0%	2.7%	0.0%	0.0%	0.0%
基礎地学実験	77	28	36.4%	53.8%	46.4%	0.0%	0.0%	42.9%	32.1%	7.1%	17.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
自然科学(選択科目)	1532	626	40.9%	36.9%	54.6%	7.3%	1.1%	47.3%	30.7%	16.8%	3.5%	1.1%	0.5%	0.2%	0.0%
基礎教育入門	358	144	40.2%	22.2%	54.9%	21.5%	1.4%	15.3%	29.2%	32.8%	12.5%	6.9%	0.7%	1.4%	0.0%
基礎統計学入門	144	90	62.5%	15.8%	56.7%	25.6%	2.2%	16.7%	25.6%	31.1%	12.2%	10.0%	0.0%	2.2%	0.0%
基礎物理学入門	48	12	25.0%	25.0%	41.7%	33.3%	0.0%	0.0%	25.0%	41.7%	16.7%	8.3%	0.0%	0.0%	0.0%
基礎生物学入門	166	42	25.3%	35.7%	54.8%	9.5%	0.0%	16.7%	38.1%	33.3%	11.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
統合Ⅰ	612	289	44.0%	46.5%	49.4%	3.7%	0.4%	42.0%	36.8%	14.1%	3.3%	2.2%	1.1%	0.0%	0.4%
統合Ⅱ	1535	583	38.0%	46.0%	46.3%	6.0%	1.7%	54.5%	30.4%	10.8%	2.2%	1.4%	0.0%	0.2%	0.3%
日本語・日本事情科目	100	27	27.0%	59.3%	40.7%	0.0%	0.0%	0.0%	25.9%	37.0%	22.2%	14.8%	0.0%	0.0%	0.0%
学芸実務科目	196	66	33.7%	25.8%	66.7%	7.8%	0.0%	27.3%	48.3%	21.2%	1.5%	0.0%	1.5%	0.0%	0.0%
合計	17072	7923	46.4%	38.8%	51.3%	7.6%	2.5%	24.6%	27.1%	27.7%	12.9%	4.5%	1.7%	0.7%	0.4%

科目名	この授業に関連して、授業時間以外に毎週平均どのくらい学習・探求をしましたか。				この授業を受講して、どれくらいの学習成果を得られましたか。		授業中に受講生自身に講義内容について考えさせるような促しがありましたか。		授業内容について、総合的に見てどのように評価しますか。	
	30分未満	30分～1時間	1時間～1時間30分	1時間30分～2時間	十分得られた	おおむね得られた	積極的に促していた	おおむね促していた	とても良かった	おおむね良かった
英語	14.5%	32.5%	26.6%	13.0%	32.7%	58.7%	60.7%	35.6%	48.3%	44.9%
英語ⅠA	16.0%	35.4%	25.2%	11.1%	33.3%	57.1%	61.6%	35.1%	48.6%	44.4%
英語ⅠB	12.2%	30.2%	28.6%	15.8%	37.4%	56.5%	63.4%	33.1%	50.3%	44.3%
英語Ⅲ	14.3%	32.3%	26.9%	10.8%	23.6%	65.9%	55.0%	40.1%	45.2%	46.5%

令和元（2019）年度前期共通教育科目授業改善に資するアンケート結果（一部抜粋）

令和元（2019）年度前期の授業アンケートは英語ⅠA、英語ⅠB、と英語Ⅲを中心に結果を説明する。英語Ⅰと英語Ⅱは獣医学部だけのクラスで、英語Ⅴは理学部（生命化学）又は農学部の学部所属担当者によるクラスである。

令和元（2019）年度のアンケート項目は平成30（2018）年度のものとは少し違うが、英語科目はコンスタントに良い結果である。英語ⅠA、英語ⅠB、と英語Ⅲでは学習成果を「十分得られた」か「おおむね得られた」と答えた学生の割合は89.5～93.9%である。英語教員が努力して、学生に講義内容について考えさせるような促しがあったかという設問に関して、95.1～96.7%の学生が「積極的に促していた」か「おおむね促していた」と回答した。英語教員の授業に対する熱意を感じたと言える。総合的な評価も、91.7～94.6%の学生が「とても良かった」か「おおむね良かった」と答えた。相変わらず高い評価を得ている。授業時間外学習の結果は1時間から2時間の時間外学習をしている学生が英語ⅠAに36.3%、英語ⅠBに44.4%、と英語Ⅲに37.7%というとても良い結果が残っている。平成30（2018）年度前期の良い結果を上回る数字になっている。また、繰り返しになるが、学生の満足度・総合評価と学生の授業時間外学習時間が両方とも良くできているのは共通教育センターの科目の中では英語科目だけである。

2019年度前期 授業7アンケート集計	科目名	受講者数	回答者数	回答率	この授業を受けて、どれくらい学習効果を挙げましたか。										授業中に受講生自身で講義内容について考えさせるような授業を受けたか。										授業内容について、総合的に見てどのよう評価しますか。									
					全くなかった	30分未満	30分～1時間	1時間～1時間30分	1時間30分～2時間	2時間～3時間	3時間～4時間	4時間以上	十分得られなかった	おおむね得られなかった	おおむね得られた	十分に得られた	ほぼ完全に得られた	完全に得られた	ほとんど得られなかった	あまり得られなかった	まあまあ得られた	とても良かった	非常に良かった	全く良かった										
	初学セミナー	1980	1325	66.9%	6.9%	24.7%	35.0%	16.7%	9.2%	4.5%	1.1%	1.9%	30.7%	53.1%	12.8%	3.5%	58.3%	4.7%	1.2%	37.5%	46.3%	11.8%	4.4%											
	大学と地域	1106	656	59.3%	55.3%	29.4%	9.0%	3.0%	1.1%	0.5%	0.6%	0.8%	32.6%	54.1%	9.0%	4.3%	39.3%	11.9%	3.8%	37.2%	49.8%	9.1%	3.8%											
	体育・健康(理論)	1111	651	58.6%	41.6%	38.9%	12.4%	5.2%	2.0%	0.9%	0.3%	0.6%	43.9%	48.2%	6.6%	1.2%	48.7%	8.0%	0.2%	46.2%	46.9%	6.1%	0.8%											
	体育・健康(実習)	938	657	69.9%	28.9%	24.4%	9.9%	4.7%	1.7%	0.5%	1.2%	44.7%	50.5%	3.0%	1.7%	49.8%	44.6%	4.4%	1.2%	55.6%	40.8%	2.7%	0.9%											
	情報活用	2002	1373	68.6%	24.0%	34.7%	23.6%	10.3%	4.2%	2.0%	0.9%	0.3%	43.6%	50.5%	5.3%	0.7%	42.1%	47.5%	9.2%	1.2%	44.8%	48.1%	6.5%	0.9%										
	英語	5565	3487	62.7%	2.1%	14.5%	32.5%	26.6%	13.0%	7.6%	2.0%	1.7%	32.7%	58.7%	7.3%	1.1%	60.7%	36.6%	3.1%	0.5%	48.3%	44.9%	5.4%	1.2%										
	英語ⅠA	1983	1395	70.3%	2.2%	16.0%	35.4%	25.2%	11.1%	7.7%	1.3%	1.1%	33.3%	57.1%	8.0%	1.5%	61.6%	35.1%	2.7%	0.5%	48.6%	44.4%	5.4%	1.6%										
	英語ⅠB	1987	1313	66.1%	2.0%	12.2%	30.2%	28.6%	15.8%	7.2%	2.1%	1.9%	37.4%	55.5%	5.3%	0.8%	63.4%	33.1%	3.0%	0.5%	50.3%	44.3%	4.8%	0.8%										
	英語Ⅰ	64	50	78.1%	2.0%	22.0%	22.0%	28.0%	12.0%	10.0%	2.0%	2.0%	22.0%	64.0%	4.0%	0.0%	59.0%	44.0%	0.0%	0.0%	50.0%	42.0%	8.0%	0.0%										
	英語Ⅱ	33	18	54.5%	0.0%	55.6%	38.9%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	27.8%	61.1%	11.1%	0.0%	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%										
	英語Ⅲ	1245	686	55.5%	2.6%	14.3%	32.3%	28.9%	10.8%	8.3%	2.9%	2.1%	23.6%	65.9%	9.2%	1.4%	55.0%	40.1%	4.2%	0.5%	45.2%	46.5%	7.1%	1.2%										
	英語Ⅳ	253	45	17.8%	0.0%	24.4%	15.6%	24.4%	8.9%	11.1%	4.4%	4.4%	24.4%	60.0%	15.6%	0.0%	35.6%	57.8%	4.4%	2.2%	8.9%	68.9%	8.9%	2.2%										
	果文化理解	2028	1340	66.1%	50.0%	32.8%	12.0%	3.1%	1.0%	0.3%	0.4%	0.4%	38.3%	54.4%	5.7%	0.7%	42.8%	59.2%	6.6%	0.6%	46.9%	49.0%	3.6%	0.4%										
	初修外国語	783	513	65.5%	3.7%	19.7%	32.4%	25.5%	10.5%	5.6%	0.8%	1.6%	53.6%	42.3%	3.5%	0.6%	66.3%	30.0%	3.1%	0.6%	62.4%	33.1%	3.3%	1.2%										
	初級英語Ⅰ	99	60	60.6%	1.7%	13.3%	43.3%	21.7%	10.0%	10.0%	0.0%	0.0%	61.7%	35.0%	3.3%	0.0%	78.3%	21.7%	0.0%	0.0%	78.3%	21.7%	0.0%	0.0%										
	初級英語Ⅱ	101	57	56.4%	1.8%	29.8%	17.5%	28.3%	12.3%	7.0%	3.5%	1.8%	49.1%	45.8%	5.3%	0.0%	59.6%	38.6%	1.8%	1.8%	59.6%	40.4%	0.0%	0.0%										
	初級中国語	372	229	61.3%	6.6%	31.1%	38.4%	18.0%	5.7%	0.4%	0.4%	1.3%	46.9%	46.5%	5.3%	1.3%	53.5%	40.4%	5.7%	0.4%	46.1%	45.2%	6.1%	2.8%										
	初級韓国語	185	150	81.1%	2.0%	26.7%	38.0%	16.7%	12.7%	0.7%	0.7%	2.0%	63.3%	36.0%	0.7%	0.0%	80.7%	17.3%	1.3%	0.7%	80.0%	18.0%	2.0%	0.0%										
	中級英語A・中級英語B・韓国語A	26	18	69.2%	0.0%	11.1%	38.9%	27.8%	16.7%	0.0%	0.0%	5.6%	44.4%	55.6%	0.0%	0.0%	89.9%	11.1%	0.0%	0.0%	77.8%	22.2%	0.0%	0.0%										
	人文・社会科学(選択科目)	2411	1087	45.1%	31.9%	35.3%	10.2%	8.4%	3.8%	1.1%	0.5%	0.8%	40.0%	51.9%	6.8%	1.3%	46.7%	40.4%	1.6%	1.3%	50.1%	43.9%	5.1%	0.9%										
	実験科目	1492	723	48.5%	18.1%	14.2%	12.9%	14.8%	13.6%	13.7%	6.6%	4.1%	44.8%	48.5%	5.4%	1.2%	52.3%	41.2%	5.5%	1.0%	44.7%	48.1%	5.4%	1.8%										
	基礎物理学実験	538	292	54.3%	2.7%	6.5%	13.4%	17.5%	15.4%	20.2%	16.4%	7.9%	40.1%	50.7%	6.2%	3.1%	47.6%	44.5%	6.5%	1.4%	36.6%	53.4%	6.2%	3.8%										
	基礎化学実験	482	196	42.4%	1.0%	7.1%	12.8%	25.0%	19.4%	6.6%	3.1%	4.4%	50.7%	43.4%	6.8%	0.0%	52.8%	40.8%	5.6%	1.0%	46.4%	46.9%	6.8%	0.0%										
	基礎生命科学実験	326	153	46.9%	52.3%	30.7%	11.8%	2.6%	1.3%	0.7%	0.6%	0.7%	58.2%	39.2%	2.6%	0.0%	60.8%	35.9%	3.3%	0.0%	54.9%	40.5%	4.6%	0.0%										
	基礎生物学実験	188	82	48.8%	50.0%	28.0%	13.4%	3.7%	2.4%	1.2%	1.2%	0.6%	40.2%	54.9%	4.9%	0.0%	52.4%	40.2%	6.1%	1.2%	50.0%	46.3%	1.2%	2.4%										
	自然科学(選択科目)	2094	1086	51.9%	38.6%	30.8%	19.5%	7.2%	2.2%	1.0%	0.2%	0.5%	31.5%	56.2%	10.8%	1.7%	31.5%	51.0%	15.1%	2.4%	40.2%	52.4%	6.5%	0.8%										
	基礎算数入門	1414	645	45.6%	12.6%	28.8%	31.8%	15.7%	7.0%	3.1%	0.2%	0.9%	19.1%	55.7%	22.3%	2.9%	25.3%	48.7%	22.3%	3.7%	21.6%	56.9%	18.6%	2.9%										
	基礎数学入門	679	315	46.5%	15.6%	32.4%	31.1%	13.7%	4.8%	1.3%	0.3%	1.0%	10.8%	53.0%	16.7%	4.4%	14.9%	48.3%	31.4%	5.4%	14.8%	55.9%	24.4%	5.1%										
	基礎物理学入門	155	69	44.5%	10.1%	31.9%	34.8%	11.6%	8.7%	2.9%	0.6%	0.6%	31.9%	50.7%	15.9%	1.4%	46.4%	5.8%	0.0%	39.1%	52.2%	8.7%	0.0%											
	基礎生物学入門	212	102	48.1%	15.7%	32.4%	26.3%	15.7%	6.9%	2.9%	0.6%	0.6%	38.2%	56.9%	4.9%	0.0%	20.6%	54.9%	22.5%	2.0%	26.5%	66.7%	6.9%	0.0%										
	基礎化学入門A	118	46	40.7%	8.3%	12.5%	39.6%	16.7%	12.5%	8.3%	0.6%	2.1%	18.6%	56.3%	22.8%	2.1%	47.9%	41.7%	10.4%	0.0%	18.8%	54.2%	22.9%	4.2%										
	基礎化学入門B	69	27	39.1%	3.7%	29.6%	25.9%	14.8%	7.4%	0.6%	0.3%	0.7%	14.8%	66.7%	11.1%	7.4%	33.3%	44.4%	18.5%	3.7%	11.1%	63.0%	25.9%	0.0%										
	総合Ⅰ	754	374	49.6%	31.3%	32.9%	22.5%	8.3%	3.5%	0.6%	0.3%	0.5%	37.4%	53.2%	7.2%	2.1%	51.1%	39.9%	7.5%	1.6%	44.1%	46.7%	5.9%	1.3%										
	総合Ⅱ	1442	593	41.1%	41.5%	31.0%	17.7%	5.7%	1.0%	1.2%	0.3%	1.5%	30.0%	52.3%	7.3%	1.5%	34.6%	46.4%	15.9%	9.2%	43.8%	50.8%	5.2%	0.2%										
	日本語・日本事情科目	94	60	63.8%	3.3%	16.7%	26.7%	15.0%	8.3%	3.3%	0.3%	0.6%	70.0%	25.0%	5.0%	0.0%	69.3%	26.7%	0.0%	0.0%	73.3%	23.3%	3.3%	0.0%										
	学芸賞科目	245	75	30.6%	41.3%	32.0%	17.3%	9.3%	0.0%	0.6%	0.6%	0.6%	41.3%	54.7%	2.7%	1.3%	40.0%	38.7%	18.7%	2.7%	32.0%	56.0%	6.7%	5.3%										
	合計	25479	14645	57.5%	23.1%	28.1%	14.0%	6.7%	3.6%	1.3%	1.2%	36.9%	53.5%	7.9%	1.6%	48.7%	41.9%	8.0%	1.3%	45.0%	46.9%	6.8%	1.5%											

科目名	この授業に関連して、授業時間以外に毎週平均どのくらい学習・探求をしましたか。				この授業を受講して、どれくらいの学習成果を得られましたか。		授業中に受講生自身に講義内容について考えさせるような促しがありましたか。		授業内容について、総合的に見てどのように評価しますか。	
	30分未満	30分～1時間	1時間～1時間30分	1時間30分～2時間	十分得られた	おおむね得られた	積極的に促していた	おおむね促していた	とても良かった	おおむね良かった
英語	21.8%	37.4%	22.2%	9.9%	33.4%	58.5%	59.1%	36.6%	50.5%	43.8%
英語ⅡA	18.2%	37.7%	25.8%	10.5%	36.2%	56.9%	62.0%	34.6%	50.3%	44.4%
英語ⅡB	21.7%	37.8%	20.9%	9.7%	36.4%	55.7%	58.6%	35.2%	52.9%	40.8%
英語Ⅳ	27.4%	37.1%	18.0%	9.8%	24.5%	65.9%	55.4%	41.6%	50.3%	45.5%

令和元年度（2019）後期共通教育科目授業改善に資するアンケート結果（一部抜粋）

令和元（2019）年度後期の授業アンケート結果も前期と同様、とても良い結果になっている。英語ⅡA、英語ⅡB、と英語Ⅳのデータから、90.4～93.1%の学生が「十分」か「おおむね」学習成果を得られたと感じている。教員から考えさせるような促しがあったと思っている学生の割合（「積極的に促していた」＋「おおむね促していた」）が93.8～97.0%であった。また、総合的評価も93.7～95.8%という高い数字を維持している。授業時間外学習の時間ももちろん確保されていた。英語ⅡAに36.3%、英語ⅡBに31.6%、英語Ⅳに27.8%の学生が1時間から2時間の時間外学習を行っている。

令和元（2019）年度の前期後期をとおして評価に値する点は、共通教育の英語(全科目)において、授業の総合評価が全体的に高評価を受け、9割以上の学生が内容に満足しているという評価（「とても良かった・おおむね良かった」前期：93.2% /後期：94.3%）が出ている点である。また、全体をとおして学生が十分に授業時間外に学習の時間を取っていること、授業中に努力をしたこと、そして、英語力を向上したと答えたことから共通教育の英語部門の先生全員の授業が効果的であり、学生の英語力を伸ばすことに専念している傾向が見られる。他大学の共通教育英語と比較しても、きっと鹿児島大学の英語教育に匹敵するところは殆どないと思える。この結果は大学と教員の長年の地道な努力によるものに違いない。

各教員の授業アンケート結果も保存されている。しかし、これらの結果すべてを載せるスペースが残念ながらない。そこで、一人の教員の英語 IA・IIA、英語 IB、英語 IIB、英語 III、と英語 IV の授業アンケートを一つずつ例として紹介する。この教員の総合的評価と授業時間外学習時間が両方とも英語科目の中では割と平均的であるが、合計データから見る必要はないだろうと考える。むしろ学生一人ひとりからのコメントを見れば、授業内の様子が分かると思う。アンケート項目として「この授業で特に良かった点は何ですか」という自由記述欄が設けてあるので、これもエビデンスの一部として挙げる。

英語 IIA（後期科目）、農学部、金曜日 2 時限、28 件のコメント

ネイティブな英語をたくさん聞いた。/課題が英作文だったため、書く力がついた。/分からないところは日本語で話してくれたのが分かりやすくて良かったです。/優しい/説明の時に日本語を多く使ってくれたこと。/グループで話し合う時間があって、理解を深めることができた点。/"グループワークを課していたところ"/わからない単語を例をあげて説明してくれた点。/全て英語だったところ。/先生が優しくて授業に参加しやすかった。/生徒の考えを聞くことで、いろいろな考えがあることを実感させられた。/生徒に質問を投げかけ、生徒自身に考えさせるようにしていたところ。また、負担のない範囲で課題を出していたところ。/具体例を交えて簡単な英語で噛み砕いて説明して下さることが多かったので、わかりやすかったです。/様々な文化の特徴を英語で考える機会があって良かった。/グループで話し合う時間を長くとってくれたこと。/書く力、読む力、聞く力のいろんな能力の向上に繋がった。/読む、聞く、話す、書くそれぞれ充実していました。/英語の聞き取りの練習ができた。/授業全てが英語だったのでリスニング、ライティング、スピーキングがバランスよく学べたところ。/分からなくてもフォローして頂けた点。/教科書に沿って授業があるので予習、復習がやりやすかったこと。/グループでの教科書を読み上げたりする所が良かった。/ライティングの宿題で、自分の考えを英語で述べる練習ができたこと。/先生の話す英語を聞き取り理解しようと努めたことで、それまでの試験的なリスニング能力ではなく、より生きたリスニング能力を得られた。また質疑応答により英語で話す能力も鍛えられた。異文化を知れたこと。他国と比較することで、日本人の考え方の傾向を真剣に考えるきっかけになった。/課題でエッセイを書くことも面白かった。/TOEFL style の問題を使用していること。/いろんな文化を英語を通じて学ぶことができたこと。/英語で学ぶはじめての異文化コミュニケーション論ということで、文化の違いから、いろんな考え方があるのだと言うことを知ることや、広い視野を持って異文化について考えるよう促していた点。単語や発音が丁寧に教えられていた点。/先生の話も面白かった。/英語でのプレゼンテーションです。

英語 IA・IIA はリーディング中心の科目である。この科目は、高校のリーディング授業と少

し違って、文法中心のインプット型ばかりではなく、アウトプットも取り入れている。学生のコメントでは、単語や発音を習った、TOEFL-Styleの問題を解いた、グループでの音読が良かった、4技能の様々な能力の向上に繋がったなどの回答が得られたので、授業の目標が達成できたと言える。また、異文化に関する教科書コンテンツや宿題としての英作文も好評だったと思われる。

英語 IB (前期科目)、水産学部、金曜日 2 時限、27 件のコメント

エッセイの土台を固めることができた点。/英語の writing を中心に学ぶことができた。
/先生が親しみやすく授業がとても楽しかったこと。/何度もレポートを書くことで、英語で文章を書くことに慣れることができた点。/先生が優しい。/授業内でレポートを書く時間があつたこと。/授業に参加するように促してくれたこと。/近くの人と話す機会が多くあり、情報を共有しながらの授業だったのでとてもやりやすかつた。/essay の課題がちょうどいいぐらいに課された点。/グループワークを通して積極的な議論を行うことができ、また英語を用いてこれを行う経験を積むことができ、良かった。/二週間に 1 回のペースでエッセイがあること。/essay を書く上でのポイントを多く知れた。先生が外国人なのでネイティブな音を聞ける。日本語でなく英語で授業が進むところ。/毎回のレポートを、ちゃんと添削してくれて、次はこうするようにと教えてくれた所宿題の量がちょうど良い。/英語を書く機会が多く与えられるため、筆記力が少しついた気がした。/先生が優しくかつた。/自分の名前の筆記体での書き方を知れた点。また英語でのレポートの書き方を学べ、また書くことに少し抵抗がなくなつたこと。/様々な人と仲良くなれる。文章を書く機会が多くて英作力が身についた。/点数が危うい時に忠告してくれたこと。友達とペアワークの時間をたくさん作ってくれたこと。他人の考えをしっかりと知ることができたし、とても有意義な時間になっていたと感じます。/わからなければ日本語で説明してくれる点。/基礎の繰り返しで作文の構成がある程度出来るようになった。/優しい/先生が優しくて教えること。/

In this class, I can improve my writing skill well. Moreover, presentations help me feel more confidence than before. Teacher is enthusiastic and I feel very comfortable in this class. I like the way of assessing student academic achievement, evaluating through the learning process (essays and presentations), without basing on the final exam. Therefore, I hope that in the next term I will be your student.

英語 IB のライティングの授業では、学生のコメントから英語文章の書き方が良くなつたことを推測できる。高校で殆ど勉強する機会がないエッセイの書き方を基本的なところから詳しい説明と毎週の練習により筆記力がついたと考えている学生が多いと思われる。このクラスの一番大事な目標が達成できたと言える。また、他のコメントを見れば、学生が積極

的に参加した、グループワークが好きだった、会話力がついた、宿題の量が適切だったなどの好意見がたくさんあったということが分かる。

英語 IIB（後期科目）、農学部、月曜日 3 時限、24 件のコメント

宿題で自分の意見を書くことがあったこと。/積極的に英語を用いて授業をし、スピーチや課題を通して、英語を話したり書いたりする機会が増えたこと。/コミュニケーションをよく取るところ。/生徒に意見を聞く点。/グループで発表するところ。/発表のシステムがグループからクラス発表へと段階を踏んでいて良かった。/スピーチのお手本を見てから自分のスピーチを考えられるところが良かった。/スピーチをする段階をまずは少人数のグループから始めて最後にクラスの前でするのが良かった。/毎週エッセイを書いていた点。プレゼンテーションの練習が行えていた点。ほぼオールイングリッシュであった点。/本文の会話文の中で分かりにくそうな単語を書き出してくれて日本語も交えながら意味を教えてくれたのがとても役に立った。/優しく教えてくれます。/段階を踏んでスピーチをしたこと。/プレゼンテーションの練習を段階的に行っていた点。概ね授業の進め方が毎回決まっていた点。/グループワークや、声に出して英語を読む機会が多い。原稿を書き英語でプレゼンをし、英語の文章を書くことにも慣れたし、声に出して読み上げることで以前よりも発音などに気をつけるようになった点。/だらだらと授業を進めず、ちょうどいいスピードで進めていた点。/毎週エッセイの宿題があり、グループ内で発表したり前に立って発表したりすることが出来てプレゼンに少しずつ慣れていくことが出来た。/宿題で書いてきたやつをグループで発表するのでちゃんと宿題をしないとイケないしそのおかげで質の高い内容の宿題ができた。/英語圏の人たちの実際に使う言い回しなどが分かったところ。/授業中に、前の席の人ばかりではなく前から後ろまで色々な人に問いかけていた点、ばらつきがなくみんな喋れてよかったと思う。/毎回のエッセイの課題が出る点、文章を英語で書く力がアップしたと思われるので良かった。/毎回ライティングをすることで英語の文章を書くスピードが上がった。また、授業中に質問に考える場面がもうけてあってよかった。/プレゼンを数段階に分けて徐々にレベルを上げていくような授業だったので取り組みやすかった。/ほとんど英語のみでの授業だったので英語に触れる機会が増えた。/英語を聞き取ったり、話すことがすごく苦手だったけど、ずっと英語だったので、少しは聞き取れるようになったことと話す機会がたくさんあったことが良い点だと思う。/複数の人々の前で話すことができるようになるような授業内容になっていたこと。

英語 IIB は英語 IB で身につけたライティング力を活かしながら、スピーキング・プレゼンテーション中心に行われる科目である。学生がスピーチ・プレゼンテーションできるようになることが授業目標なので、目標が達成できたと学生のコメントから推測できる。コメントの一部抜粋すれば、「複数の人々の前で話すことができるようになる」「プレゼンを数段階に

分けて徐々にレベルを上げていく」「コミュニケーションをよく取る」「プレゼンに少しずつ慣れていくことができた」などの好意見が寄せられた。

英語 III (前期科目)、教育学部、水曜日 3 時限、21 件のコメント

学術的な英語のエッセイの書き方を具体的に学ぶことができた点。/たのしかった！
グループワークがある点。/わかりやすい。/日本語をあまり使わず英語のみでの会話が多かったため、英語がより親しく感じられた。/アンケートをすることでデータ集めの大変さがわかったこと。/エッセイごとにプレゼンテーションがあり、グループでのプレゼンテーションがあつて、皆の前で最終プレゼンテーションへの練習になってよかったです。英語技能を向上させるために、エッセイを 3 回書き、実際に学術英語を使う機会があつた。/英作文演習で、自分でテーマを考えて作文をつくれたこと。先生がわかりやすく説明してくれたこと。/講義中に日本語がほとんどなく文章を理解するだけでなくヒアリングの勉強にもなった。これは日本人講師にはない外国人講師の強みだと感じた。/無駄な時間がなかった。/自分の書いたエッセイを先生が添削してくれていて、間違っているところに気づくことができた点。文法の間違い探しと訂正の活動を通して、正しい文法を学ぶことができた点。/アカデミックライティングの書き方を例を用いながら教えていただいたので、新しい書き方を学ぶことができた。また、自分のテーマについての内容を自分なりに英語で話し、グループでプレゼンすることによって、堅くなりすぎずに英語を活用することができた。/基本的に英語で常に集中できたことと先生が生徒のスケジュール等にすごく気を使ってくれたこと。/生徒が能動的に授業に取り組める点。/英語のスピードが少し早く聞き取れるか聞き取れないかぐらいだったので多少は聞き取ることができようになった。/アカデミックイングリッシュを学べたこと。/学術英語の書き方について学ぶことが出来た点。/間違えることを恐れずに発言することができたこと。/先生が一人一人のエッセイをチェックして、間違いを指摘してくださったこと。間違いの例文を読んで間違いを見つける作業をしたこと。おかげで自分がエッセイを書くときに間違いに気を付けるようになった。/グループワークが数回あつたので英語で他人と話す機会があつたこと、ほぼ毎週宿題があつたのが自宅での学習につながつたことが良かったです。

英語 III は 4 技能の統合を活用しながら、リサーチ・プロジェクト形式で行われる科目である。学生のコメントを見れば、データ集め、学術的な英語のエッセイ、プレゼンテーションの練習が高く評価されていたことが分かる。英語 III の目標が達成できたと言える。また、グループワークが良かった、添削が丁寧だった、会話力がついた、能動的に授業に取り組めた、宿題の量が適切だったなどのコメントがあつた。

英語 IV（後期科目）、工学部（化学系）、水曜日 5 時限、25 件のコメント

生徒への問いかけが多かった点。/授業中に当てられて分からなかった時や遅刻した時に、英語でなんと行えば良いかを学習できた点。/化学式や分数を英語で言えるようになった点。/リスニングが鍛えられる。/シャドーイングがあったこと。/英語のみの授業だったので英語耳になることが出来た。/色々な知識を得られた。/英語を読む練習がしっかりできたところ。/専門分野に関しての映画について学ぶことができた。/化学と英語がよくマッチして面白かった。/シャドーイングができた所。/英語を聞き取るよい練習になった。/シャドーイングを授業の中でしていた。/化学系の教科書を使っていた点。/化学用語を知ることができた。/アクティブラーニングが多かった点。/先生とのコミュニケーションをとる事で普段できない英会話をする事が出来たこと。/化学についての知らない用語もいくつか知れたこと。/文章を読み発音することで英語を考えながら使えた気がした点。/シャドーイングが良かった。/単語を読む時間があった点。/化学英語を多く知ることができた点。/分からないところは日本語で言ってくれたところ。/授業の殆どが英語で進められたこと。/簡単な化学のプロセスを英語で学べたこと。/shadowing という新たな学習方法を得られた点。/化学に関する英語の文章を読んで実際に使われている英単語を覚えることが出来たこと。/シャドーウィングができて良かった。

英語 IV は専門英語の導入偏として基礎的な専門英語（リーディング中心）を習う科目である。学生コメントの一部を抜粋すれば、「化学式や分数を英語で言えるようになった」「専門分野に関しての英語について学ぶことができた」「化学と英語がよくマッチして面白かった」「化学用語を知ることができた」「簡単な化学のプロセスを英語で学べた」などの意見が寄せられた。また、シャドーイングという学習方法が特に好評だったように思われる。

B-2. 令和元（2019）・平成 30（2018）年度 鹿児島大学 IR コンソーシアム・アンケートについて

令和元（2019）年度 鹿児島大学 IR コンソーシアム・アンケート（問 8 のデータ）の結果から本学の英語教育の成果が確認できる。

英語能力を聞力、読む力、会話力、表現力、書く力の 5 つの観点から、B1 以上（会話力 A2.1 以上）が到達レベルになっている、と自己評価している学生の割合は下記の通りである。

	1年生入学時	1年生現在（11月）	3年生現在（11月）
聞く力（B1以上）	43.5%	51.1%	34.3%
読む力（B1以上）	70.6%	74.5%	57.1%
会話力（A2.1以上）※	54.1%	63.5%	47.3%
表現力（B1以上）	57.3%	65.7%	46.7%
書く力（B1以上）	59.5%	66.4%	41.3%

このデータからお分かりいただけると思うが、1年生の英語力がバランスよく伸びている。特に会話力の伸びが堅調である。しかし、3年生の英語力が落ちていると思われる結果になっている。これは、ほとんどの学生が最初の1年間しか英語の授業を受けないため、2年間のギャップが大きく影響している可能性がある。実は、他大学の多くも同じような結果になっている。鹿児島大学では、1年次の共通教育には特に問題がないと言えるが、その後の2年次～4年次（学部によって6年次）の英語教育が足りないまたは良くないと推定できる（おそらく英語の授業が不足していると一般的に考えられる）。学部の専門教育に英語の授業を組み込む必要があると断言できる。

平成30（2018）年度 鹿児島大学 IR コンソーシアム・アンケートの結果からは、次のような英語運用能力の熟達度及び英語学習の状況を確認することができる。

	[A]聞く力	[B]読む力	[C]会話力	[D]表現力※	[E]書く力
2018_4月	37.8%	68.0%	51.7%	51.1%	54.0%
2018_11月	48.7%	73.5%	62.8%	64.1%	63.1%

平成30（2018）年度1年生の入学時（平成30（2018）年4月）と入学後（平成30（2018）年11月）における英語力（聞く力・読む力・会話力・表現力・書く力）の熟達度に関して、各能力を主要層のB1からC2項目（英語学習者として最も能力が高いレベルを示す）に注目した結果（※＝会話力に関してはA2.1からC2）、学生は入学時から調査実施時の11月まで、全ての能力において伸びていると実感しているようだ。つまり、学生は入学時において自身の英語力に自信がなかった可能性があるが、本学入学後に受講した共通教育の英語授業が良い成果をもたらしたという見方ができる。

	入学後の外国語の運用能力(1年生) 「増えた・大きく増えた」の回答率
平成 27 (2015) 年度 (改訂前)	31.3%
平成 28 (2016) 年度 (改訂)	35.3%
平成 29 (2017) 年度 (改訂後)	42.4%

平成 28 (2016) 年度共通教育の英語カリキュラム改訂後の変化に注目してみる。上記の結果は、平成 27 (2015)、平成 28 (2016)、平成 29 (2017) 年の 1 年次生が入学後の外国語運用能力について回答したものである。ここでは平成 30 (2018) 年度の調査対象者が過年度と異なるため、あえて比較対象から除いてあるのだが、カリキュラム改訂後「増えた・大きく増えた」と答えた学生の割合が年々上がっていることが分かる。これは新カリキュラムが良い効果をもたらしていること、そして何よりも学生自身が英語力の上達を実感していることであり、評価に値することといえる。また、新カリキュラムが実際の学生のニーズに適合しているか検討を重ねながら、カリキュラムが定着するように改善を図った教員の努力の成果ともいえる。

	[A]聞く力	[B]読む力	[C]会話力※	[D]表現力	[E]書く力
2015 年11月 B1以上	53.7%	75.6%	63.6%	69.9%	60.4%
2017年11月 B1以上	65.1%	86.2%	75.6%	81.7%	74.5%

英語のカリキュラム改訂前の平成 27 (2015) 年 11 月と改訂後の平成 29 (2017) 年 11 月の聞く力、読む力、会話力、表現力と書く力をスキル別で比較してみる。特に主要層である B1 から C2 (※=会話力に関しては A2.1 から C2) の項目に注目した結果、全ての能力において伸びていることが分かる。聞く力、読む力、会話力、表現力において特に日常生活、身近な話題、興味関心に関連する B1、B2 の層を中心に伸びている傾向があった。また書く力においては B2、C2 (論理的に説明する力) の層が伸びており、全ての能力の中で最も伸びているということが分かった。これは共通教育英語の目的でもある実用的で且つ教養的な英語力の育成に到達しつつあるといえる。今後、すべてのスキルにおいて B2、C1 レベルの層を伸ばせるよう、4 技能統合型授業を主体とした英語授業の工夫を検討する必要がある。

	[A]聞く力	[B]読む力	[C]会話力	[D]表現力	[E]書く力
1年次 B1以上	61.3%	77.3%	15.7%	75.9%	64.7%
3年次 B1以上	30.6%	50.0%	8.8%	38.7%	36.2%

平成 28 (2016) 年度入学者 (平成 30 (2018) 年度の 3 年次生) の 1 年次 (平成 28 (2016) 年 11 月) と 3 年次 (平成 30 (2018) 年 11 月) の英語力の変化については、1 年次と 3 年次のデータを比較した場合、B1 以上の項目になるにつれ、全ての能力において 1 年次より割合が下がり、望ましい結果だとは言えない。1 年次、2 年次の学生を中心に担当している共通教育の教員が 3 年生の英語教育の分析を行うのは難しい面があるが、おそらく、2 年次、3 年次に英語を学ぶ機会が少ない学部学科があることが主な原因だと推測される。また、3 年次になると専門性が高くなるためとも考えられる。3 年次の学生に関しては、学部での英語教育がカギとなり、4 年間を通した英語教育を考えるべきである。

平成 30 (2018) 年度 鹿児島大学 IR コンソーシアム・アンケートの結果より、平成 30 (2018) 年度入学の 1 年次生において、入学後から 11 月までの間、聞く力、読む力、会話力、表現力、書く力が全て伸びていること、また、新カリキュラム導入後の効果が出ていることは非常に評価できることである。一方、令和元 (2019) 年度の分析と同様、2 年次、3 年次になると学部のカリキュラムによっては、英語の授業がなくなるため、英語力が下がることは非常に残念なことである。学部と連携した 4 年間もしくは 6 年間を通した英語教育を考えないといけない。

B-3. 鹿児島大学の学修成果に関する学部卒業生調査について

鹿児島大学の学修成果に関する学部卒業生調査(これから、卒業生調査)は、平成 26 (2014) 年度に学部を卒業した学生が対象になっていたため、平成 28 (2016) 年度から始めた新英語カリキュラムの前の結果である。また、有効回答者の 145 名が全体対象者の 9%にも満たない割合なので、データの信憑性には疑問を抱くところがある。しかしながら、現在の英語教育の状況を表すため、データとして使えるところもある。

調査結果を見ると、約 38%の卒業生にとって、外国語教育科目が人生や知的成長に「まあ役立っている」か「とても役立っている」ということが分かる。これは悪い数字ではないが、良い結果でもない。また、約 31%の卒業生にとって、外国語科目が仕事や活動に「まあ役立っている」か「とても役立っている」という結果になっている。これも良くも悪くもない数字だと考える。但し、6 年前の結果であるので、グローバル化が進んでいる今日はどんな答えになるか分からない。

興味深いのは、卒業生にとってもっと勉強しておけばよかった科目が突出して外国語科目であったことだ。約 67%の卒業生が「まあそう思う」か「とてもそう思う」と回答した。英語を勉強しなかった、勉強できなかったことに関して後悔している卒業生が大変多いという結果である。英語が勉強できる機会をもっと増やせばいいのではないかと思われる。

卒業生の書いた英語教育と直接関係があるコメントは二つほどあった。教育学部の卒業生から「外国語やグループでなにかを解決する力を養う講義を取り入れるべきだと感じる」

という意見があった。理学部の卒業生から「英語の授業を TOEIC 高得点を取得するもの、英会話に役立つものにすべき」という意見があった。教育学部生の意見に対応したように、新カリキュラムの英語 III に PBL という学習方法を取り入れている。現在の教育学部 2 年生が問題解決型学習という方法で勉強に励んでいる。理学部の学生が推した TOEIC 対策授業という提案に関して、この報告書の最後にもう少し考えを言わせていただく。しかし、2 年次後期または 3 年次前期から TOEIC の勉強を導入することは悪くない。コストなどの実際問題はここでの話から省いておく。次に、英会話の導入に反対ではないが、35~40 人のクラスでは現実的ではない。クラスサイズを減らさない限り、英会話が取り扱えない。その代わりに、LOL 外国語ラウンジを平成 29 (2017) 年度後期から始めた。英会話を習いたい、英語で気軽に話したい学生に LOL の参加を進める。

このアンケートから見受けられることは卒業生が共通教育の授業に関して良い印象を持っていたということである。特に、外国語科目に関しては「もっと勉強しておけばよかった」という回答が目立った。英語に触れる機会が最初の 2 年間で終わる学生が多いため、英語をもっと勉強したい学生の意欲に応えるため、将来は上級生のために英語の授業を増やしても良いのかもしれない。また、外国語科目が人生や仕事に役に立っていないという批判的な意見があったものの、その背景としては実際に外国語を使う仕事についていない可能性もあり、外国語科目授業の質を表すものではないと考えられる。さらに、1700 人中 145 人しか回答しなかったため、外国語科目に対しての回答は必ずしも決定的なものとは言えない。

令和 2 (2020) 年 5 月に令和元 (2019) 年度の卒業予定学部生 (回答数 742 名、回答率 35.2%) に同様の調査の最新版が出た。残念ながらこれも大学にとって望ましい結果ではなかった。卒業予定者が自分の外国語運用能力の水準が低いと相当の割合で回答した。また、学生の意見・要望として英語教育に関するコメントが一つしかなかったが、「英語学習をできる機会が少ない」という否定的な意見であった。しかし、学生が事実を言っているだけだと認めざるを得ない。特に 3 年生~4 年生 (又は 6 年生) に英語の授業数が増えれば、調査結果が良くなると思う。

B-4 CEFR-J アンケートについて

グローバルスタンダードに準拠した英語力評価について、文部科学省はそれに特化した連絡協議会を設置した。グローバル対応型の学力評価・測定ツールとしてふさわしい英語の資格・検定試験が示される一方、言語使用能力を示す CEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) を取り上げている。ルーブリック化されたこの言語能力指標を活用し、従来の筆記・口頭試験だけでなく、多面的に英語力を測定・評価していこうとする外国語教育政策である。

この視点を念頭に、GTEC CTE による英語力評価とあわせ、日本人学習者用に準備された CEFR-J を導入した (平成 30 (2018) 年度末まで)。これは CEFR で提案された 3 つの観点か

らみた英語運用能力 (interaction, reception, production) と大学生として求められるレベル、つまり「自立した言語使用者」(B レベル) を焦点にしており、そのためのアンケート調査である。言いかえるとこのルーブリックで提供された質問項目に回答することで、学習者が自らの英語実践・運用能力を自己診断することが可能となる。その結果をもとに GTEC CTE の試験結果(診断データ)から掬い取れない、細部に亘る英語学力(実践・運用能力)を明らかにできる。それにより、効果的、効率的な学習ストラテジーを、自発的かつ自律的に行える学習者として成長していくことが期待されている。

具体的な質問項目を以下に示す。GTEC CTE 受験終了後、同じく PC 画面上で、このアンケートに回答してもらった(約 15 分程度)。

資料 平成 28 (2016) 年度アンケート調査内容

このアンケート調査は、本日受験した G-TEC CTE (英語学力試験) とは別の観点からあなたの英語学力(学習実践および到達度)を測定することが目的です。

質問は

<Part I> (英語運用能力に関する技能別観点) (28 問)

<Part II> (外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠日本人学習者用: CEFR-J) (14 問) から構成されています。

この調査は継続して行い、つぎの学期でも G-TEC CTE (英語学力試験) 終了後に行います。それにより、(I) テストベースの英語学力、(II) この調査から得られた学習実践・到達度という、

2つの側面から総合的に測定評価し、結果をフィードバックしていきます。

それにより、英語力と英語学習力の総合的なレベルを知ることができ、あなた自身に合った英語学習方法の構築、自発的・自律的な英語学習習慣の確立、そして学習動機づけの安定化に向けた重要な参考データとなります。

(注意とお願い)

1. 質問数が多いため、面倒くささらず、まじめに最後まで回答してください。
2. 深く悩んだり、考えたりする必要はありません。第一印象をもとに、手際よく回答して行って下さい。

■ 1問=30秒以内を目安にしてください。 21分以内に終わる形で進めてください。

3. 質問がある場合、担当教員に連絡してください。

では始めてください。

基本設問情報

設問1 入学年度を選択してください。

--選択してください。--v

設問2 学部/学科/学籍番号を入力してください。(100文字以内)

設問3 氏名を入力してください。(20文字以内)

<Part I> (英語運用能力に関する技能別観点) (28問)

[回答で使う6つのスケール] ※番号を1つ選んでください。

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 = まったくできない | 4 = どちらかといえばできる |
| 2 = ほとんどできない | 5 = ほとんどできる |
| 3 = どちらかといえばできない | 6 = じゅうぶんできる |

[A] 英語によるライティングに関して

1. 伝えたい内容をより具体的にし、発信情報をわかりやすくしながら書く

1----2----3----4----5----6

2. 内容全体を論理的な構成に整えて書く

1----2----3----4----5----6

3. 英文と英文のつながりが、論理的にスムーズにつながるように書く

1----2----3----4----5----6

4. 一つの英文（文構造）に正しい文法や語法を使って書く

1----2----3----4----5----6

5. 正しく単語を綴りながら（＝正しいスペリング）で書く

1----2----3----4----5----6

6. 文や文章を見ながら正しく、または適切に句読点（， — ；）を入れて書く

1----2----3----4----5----6

7. 書き上げた英文内容をもとにキーワード化し、それを用いた視覚情報媒体

（内容を図示したもの、パワーポイントでの作図、OHP用スライドなど）を作成する

1----2----3----4----5----6

[B] 英語のリスニングに関して

1. 聞き取れた（理解できた）意思表示（うなずき、発話、ジェスチャー）を入れていく

1----2----3----4----5----6

2. 聞き取れない（理解できない）時に、繰り返してほしいリクエストを英語で言う

1----2----3----4----5----6

3. 聞き取れている（理解できている）かどうか確認したいので、それを英語で伝える

1----2----3----4----5----6

4. 聞き取れて理解している時、その内容について英語で質問をする

1----2----3----4----5----6

5. 聞き取れて理解している時、その内容について英語で自分の考えを述べる

1----2----3----4----5----6

6. 聞き取れて理解している時、その内容について英語で助言や提案をする

1----2----3----4----5----6

[C] 英語の音読に関して ※黙読は除外してください

1. 辞書から発音記号・アクセントを調べ、正しく発音する

1----2----3----4----5----6

2. 英文の意味や文構造から考えて、適切に区切りながら読んでいく

1----2----3----4----5----6

3. つまったりせず、wpm（1分単位の音読スピード）を意識してスムーズに読んでいく

1----2----3----4----5----6

4. リエゾン（発音記号の連結）ルールを見つけ、連結発音を入れながら読んでいく

1----2----3----4----5----6

5. 気持ちや感情を示すため、単語や英文に意識的に音声変化をつけて読んでいく

1----2----3----4----5----6

[D] 英語による発話や表現に関して

1. アイコンタクトを入れながら発話する 1----2----3----4----5----6

2. 顔の表情を入れながら発話する 1----2----3----4----5----6

3. 指や手の動きを入れながら発話する 1----2----3----4----5----6

4. 内容や気持ちを表すために、体の動きも使って発話する
1----2----3----4----5----6

5. 性別、年齢、出身地や出身高校を英語で言う 1----2----3----4----5----6

6. 大学に関する所属や専攻（大学名、学部、学科、学年）を英語で言う
1----2----3----4----5----6

7. 何を専門的に学んでいきたいか、研究テーマと理由を英語で言う
1----2----3----4----5----6

8. 卒業後はどのような進路を計画しているか、理由を含めて英語で言う
1----2----3----4----5----6

9. 具体的にめざすべき大学生像と、その理由や目的を英語で言う
1----2----3----4----5----6

10. どのような価値観や信念をもっているか（またはもつべきか）、英語で言う
1----2----3----4----5----6

<Part II>（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠日本人学習者用：
CEFR-J）（14問）

※ 質問番号の後のカッコ内の記号と番号は無視してください（内容と関係ありません）。

[A] 書くこと（英語）

1. (B1.1) 自分に直接関わりのある環境（学校、職場、地域など）での出来事を、身近な状況で使われる語彙・文法をもちいて、まとまりのある書き方で描写することができる

1----2----3----4----5----6

2. (B1.2) 物事の順序に従って、旅行記や自分史、身近なエピソードなどの物語文を、いくつかの段落で書くことができる。 1----2----3----4----5----6
3. (B2.1) そのトピックについて何か自分が知っていれば、自分の考えを示しつつ、ある程度の結束性のあるエッセイやレポートを、幅広い語彙をある程度使って、書くことができる 1----2----3----4----5----6
4. (B2.2) 自分の専門分野や関心のある事柄であれば、複雑な内容を含む報告書や論文などを、その原因や結果も考えて、詳細な文章で書くことができる 1----2----3----4----5----6

[B-(1)] 聞くこと (英語)

1. (B1.2) 自然な速さの録音や放送 (天気予報や空港のアナウンスなど) を聞いて、自分に興味のある、具体的な情報の大部分を聞き取ることができる 1----2----3----4----5----6
2. (B2.1) トピックが身近であれば、長い話や複雑な議論の流れを理解することができる 1----2----3----4----5----6

[B-(2)] やりとり (英語)

1. (B1.1) 身近なトピック (学校・趣味・将来の希望) について、簡単な英語を幅広く使って意見を表明し、情報を交換することができる 1----2----3----4----5----6
2. (B1.1) 個人的に関心のある具体的なトピックについて、簡単な英語を用いて、社会的な会話を続けることができる 1----2----3----4----5----6
3. (B2.1) ある程度なじみのあるトピックならば、新聞・インターネットで読んだり、テレビで見たニュースの要点について議論することができる 1----2----3----4----5----6
4. (B2.1) 自分が学んだトピックや自分の興味や経験の範囲内のトピックなら、抽象的なトピックであっても、議論できる 1----2----3----4----5----6

[C] 読むこと (英語)

1. (B1.2) インターネットや参考図書などを調べて、学業や仕事に関係ある情報を手に入れることができる。必要であれば時に辞書を用いて、図表と関連づけながら理解することができる

1----2----3----4----5----6

2. (B2.2) 自分の専門分野の論文や資料から、辞書を使わずに、必要な情報や論点を読み取ることができる

1----2----3----4----5----6

[D] 発表 (英語)

1. (B1.1) 使える語句や表現をつないで、自分の経験や夢、希望を順序立て、話しを広げながら、ある程度詳しく語ることができる

1----2----3----4----5----6

2. (B1.1) 自分の考えを事前に準備して、メモの助けがあれば、馴染みのあるトピックや自分に関心のある事柄について語ることができる

1----2----3----4----5----6

B-4-1. アンケート結果とまとめ

アンケート結果（前期、後期—1年生対象）のデータが23ページにも及ぶため、本報告書から省く。

B-4-2. 学生によるアンケート結果に係る今後の課題

データから明らかにされた点、つまり今後の教授・学習上の課題について整理しておきたい。セクションごとに要点化していく。

<Part I>

(英語運用能力に関する技能別観点) (28問)

英語によるライティングに関して

マイクロレベル(文法、綴り、句読点等)に対して、マクロレベル(内容・論理構成)の運用能力に対して自己評価が低くなっている。これは高校では習得すべきライティング知識・課題として英語授業で扱われていない部分であると推定できる。大学授業(前期・後期の1年間)を通して継続・系統的な指導が求められる。

英語のリスニングに関して

一方向的な流れに止まっている。聴き取りはできたとしても、その内容をもとにした切り

返し（やりとり）能力、すなわち確認、質問、意見、助言行為となると、自己評価が低い。大学受験（センター試験、リスニング）対策の学習レベルで留まっていることが背景にあると思われる。リスニングとは聴き取りではなく、やりとりを前提としている。このような新たな捉え方（認識）を大学授業・学習の場で継続強化し、能力強化に努める必要がある。

英語の音読に関して ※黙読は除外

単語単位（発音記号、アクセント）の発話能力に対して、文単位以上（パラグラフを含む）の音読で求められるチャンキング（区切り方）、連結発音や脱落（リエゾン）、適度な音読速度（wpm）のレベルに対する自己評価が低い。これも受験対策型英語学習から派生した負の結果（学習効果）といえる。高校の英語授業でそのルールを含め、正しい知識習得が行われていないことが原因と考えられる。しかしこれらの音読スキルは発話行為（プレゼンテーションを含む）で重要な役割をもつ。「やりとり」としてのリスニング活動と合わせて、ここで触れた評価の低い音読スキルも継続指導していく必要がある。

英語による発話や表現に関して

受験に課されない領域は、上記の音読試験に加えて、発話（プレゼンテーション）試験である。Show and Tell Practice で示される、個人個人が前に立ってスピーチをするという学習経験が高校英語授業で担保されていなかった可能性が充分ある。その結果、データが示す通り、kinesics（身体動作学—アイコンタクト、身振り手振り、体の動き）や paralinguistics（パラ言語—声調変化による意志・感情表現作法）に対する自己評価が低い。上記の音読スキルと併用した学習体験の積み重ねが必要となる。

その一方で気になるのが、自己説明力である。過去（出身高校）や基本的な情報（出身地、年齢など）は英語で言えても、現在—未来（大学入学と専攻領域の選択説明や理由、将来の人生計画など）に対する説明能力は評価が低い。このコンテクストに沿った英語発話・説明能力を育てていく必要がある。

<Part II>

（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠日本人学習者用：CEFR-J）（14問）

書くこと（英語）

自分の身の回りで起きたことなどの説明（トピック）に対して、必要とされるライティング力、とくにエッセイ作成能力に対する自己評価が低い。エッセイ能力はCEFR-J Bレベル（自立した英語学習者）を証明する重要な指標となっている。パラグラフ・ライティングからエッセイ・ライティングへの連動した教授支援体制の確立が不可欠となる。

聞くこと（英語）

メディアや空港アナウンスなど、ネイティブ・スピーカーが自然な速度で話す英語の理解に対して自己評価が低くなっている。授業で指導すべきは、聴き取りの徹底と合わせて（それ以上に）、内容のメモ取りとそれによる聞き返し（やりとり）というタスクの導入である。それにより、新たなリスニング活動の重要性を理解してもらう必要がある。

やりとり（英語）

テーマに関わらず（自身について、最近のニュースについて、その他）、議論というモードに対する自己評価が低い。ディベート授業がその対策として考えられる一方、上で述べたように、メモ取りを加え、内容の集約（要点・要約）作業を授業で取り入れる必要がある。

読むこと（英語）

インターネットや専門書など、辞書以外の情報媒体へのアクセス力の弱さを示唆している。「テーマを決め、調べて、考えて、論を立てていく」という、大学で求められる一般的なアカデミックスキルを英語を媒体として獲得していく授業づくりが重要である。

発表（英語）

すでにふれた点であるが、入学段階で止まっている状態が見られる。卒業後、あるいは3年次の専門課程を今から想像し、具体的な人生スキームを構築していく必要がある。それを具体的に、理由や根拠を交えながら英語で説明できる力が求められる。

C. 外部試験について

C-1 GTEC 実施・結果について

2008年度から平成30（2018）年度までの本学の共通教育英語科目では、1年次開設の4科目と2年次開設の1科目で外部試験を利用し、各種の取り組みを行った。この間、新カリキュラムの導入に併せて利用する試験も変更されたが、外部試験導入のねらいは一貫して次の3点に集約される：

- 成績の推移から英語カリキュラムの現状を客観的に確認し、改善に活かす
- 学生の自主学習を促す手段として活用する
- 成績評価を平準化する手段として活用する

ここでは、学術目的の英語という側面が強まった新カリキュラムの導入に合わせて平成 28 (2016) 年度から 18 年度まで利用した GTEC Academic という外部試験の運用について、上記 3 つの観点から報告する。

GTEC とは Global Test of English Communication の頭文字を取ったもので、小学生向けから社会人向けまでいくつかの種類がある。このうち、本学では GTEC Academic を採用した。この試験は学術的な内容を含み、コンピューターを使って約 30 分で「読む」「聞く」の 2 技能を測定する。なお、平成 30 (2018) 年後期は、これに「書く」「話す」の技能を加えた 4 技能版を試行したが、ここでは 2 技能版の内容に絞って述べる。

まず、学部によって 2 期もしくは 3 期に渡る GTEC Academic の受験結果について、成績推移の追跡調査を行い、英語カリキュラムの現状を客観的に確認する手がかりのひとつとして利用した。

表 1 平成 30 (2018) 年度 GTEC Academic 全学平均の推移

合計点 (リスニング+リーディング) 500 点		リスニング 250 点		リーディング 250 点	
前期	後期	前期	後期	前期	後期
219.3	218.3	112.4	109.5	106.9	108.9
t 検定で有意差なし		t 検定で有意差あり		t 検定で有意差あり	

N=1,902

例えば平成 30 (2018) 年前期と後期ともにこの試験を受験した 1,902 名のデータをもとにした成績推移を見ると、合計点の全学平均は前後期ともほぼ変わらなかった (表 1)。次に、この 2 回の試験の平均に有意差があるかどうかを判定する t 検定を行ったところ、有意差なしと判定された。このことから、全体的には当該 2 期間で同程度の英語力を維持できていることが確認された。全国的に、大学での英語外部試験の推移は受験を重ねるにつれて点数が低下したという報告が多い中では、本学の結果はまずまずの状況といえる。技能別に見ると、リーディングは前期に比べて後期の平均点が上昇しており、t 検定で有意差が見られた。本学では 1 年次に前後期ともにリーディング科目が設定されており、読解力はそのこともあって堅調に推移したと思われる。一方でリスニングは、t 検定で有意差のある低下が見られた。この低下は例年同様の傾向にあったが、その要因は特定できていない。

これらの結果を受けた授業改善として、まずはリスニング力強化の取り組みを始めている。例えば、リーディング科目でも単に読むだけでなく、耳で聞く活動を充実させている。テキストにそうした活動があれば行いやすいことから、1 年次共通教育英語科目で設定して

いる推奨テキスト制度を定期的に見直す際に、リーディング科目でもリスニングが充実したテキストを追加した。また、一部の教員が始めているオンラインの多読教材を用いた試みも、リスニング力強化の一助となる。この教材にはリーディングをスマートフォン等で聞くことができる機能があり、こうした教材のさらなる活用も考えられる。

また、GTEC の受験が学生の自主学習を促すきっかけとなるよう、工夫を行った。GTEC 試験の結果はスコアの他、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) (外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠) と呼ばれる、外国語の運用能力を測る国際的な指標に対応した現在の実力レベル等が、スコアレポートとして示される。このレポートによって、学生は自身の英語力の一端を客観的に確認できる。さらに、教員も学生向けにスコアに応じた今後の学習指針を作成し、GTEC 作成の学習法のサイトを紹介するなどの周知も行った。このように、GTEC の受験が最終目的ではなく、スコアを踏まえて学生が自ら判断して必要な英語力を強化できるよう整えた。これらの取り組みは、昨今指摘される学修成果の把握や可視化の重要性にも対応するものといえる。

さらに、GTEC 試験は成績評価を平準化する役割としても期待された。平成 28 (2016) 年度から 18 年度までの共通教育英語科目では、1 年次開設の 4 科目と 2 年次開設の 1 科目で成績の 20% を GTEC の成績で評価した。GTEC 以前の外部試験導入時に検証した結果、成績の 20% を外部試験結果で評価することで、教員間での成績評価のばらつきを是正できていることが確認されており、GTEC でも同様の効果があったものと推察される。

C-2 EF SET 実施・結果について

平成 28 (2016) 年度から導入を開始した英語外部試験の大学向け GTEC であるが、平成 31 年・令和元年 (2019) 年度は、学長裁量経費の削減により、実施ができなくなった。その代替りとして導入を検討したのが EF SET である。これはパソコンを利用したオンラインテストで、受験者のリスニングとリーディングの 2 つの技能が測定される点が GTEC と同じであることに加え、無料で使用できるため導入の検討に至ったものである。検討するにあたり、まず、令和元年 5 月に 1 つのクラスでトライアルとして実施し、どのような点が問題となるのか、不具合はないのかなどを検証した。ここでの問題点を踏まえ、7 月から 8 月の学期末にかけて、EF SET を希望する教員に実施してもらった。最終的に 5 月 31 日～8 月 7 日の間に 7 学部 431 名の学生が受験をした。EF がまとめた資料によると、431 名の合計平均は Reading が 42.44 点、Listening が 43.07 点、総合で 42.76 点であり、CEFR の基準で B1-1 レベルであった。日本の大学生の平均が A2～B1 の間であるため、平均が平均より少し上に位置しているとのことであった。

これらの実績を踏まえ、2 年次前期に英語の授業を行う教育学部、工学部、理学部、水産学部、農学部の 5 学部の 1 年次の学生を対象に EF SET を実施した。実施に向け、学生周

知ポスター、学生向け実施手引き、教員向け実施手引きなどを前期の反省を踏まえ作成した。今回は2年次の英語 III のクラス分けを行うのが目的であり、成績の一部に含めるかどうかは実施した教員に任せることとした。最終的に令和元（2019）年11月8日～12月19日の間に5学部1138名の学生が受験をし、学生の点数に基づき英語 III のクラス分けを行った。

令和2（2020）年度からは、1年生を対象に前期と後期の年2回導入する。また、試験結果の10%を2つの英語クラスの成績に組み込む予定であり、後期試験の結果は翌年の英語 III のクラス分けにも利用する予定である。

このように GTEC の後継にあたる英語外部試験は、英語教員がニーズに合うものを探し出し、採用に当たりデータなども取りながら慎重に検討を重ね、EF SET の本格的な導入に至っている。また、GTEC の時と同様に、英語ミーティングなどで学生の成績を分析し、よりよい英語教育を目指し、活用していく予定である。

D. 外国語ラウンジの活動について

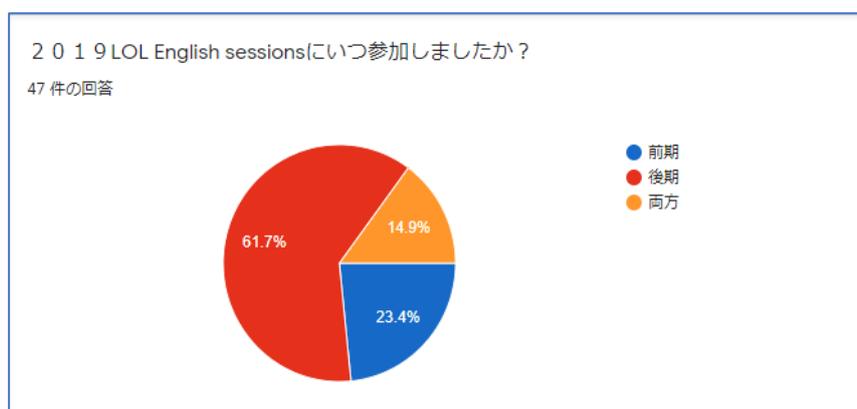
LOL（Language Out Loud）ラウンジを使用しての外国語教育促進への取り組みは、平成29（2017）年の後期より共通教育センター外国語教育部門によって開始され、平成30（2018）年の前期より本格的に始動した。中でも、講師を招いての学生対象の無料英語セッションは、週に三回行われ、内容や実施形態は例年オンラインによるアンケートの結果を参考に改善されている。令和元（2019）年はGoogle Formを利用したオンラインアンケートを行い、計47名の学生（累計参加者の約8分の1）からの回答を得られた。本稿では、令和元（2019）年のアンケートの結果から、学生のセッションへの参加傾向や英語学習に対する意欲の変化、次年度へ向けての改善点について考察する。

アンケート結果

セッションへの参加傾向

まず、学生がどの時期にセッションを利用したかを尋ねたところ、約62%の学生が後期のみに参加したと回答し、前期のセッションへの参加者数を大きく上回った。

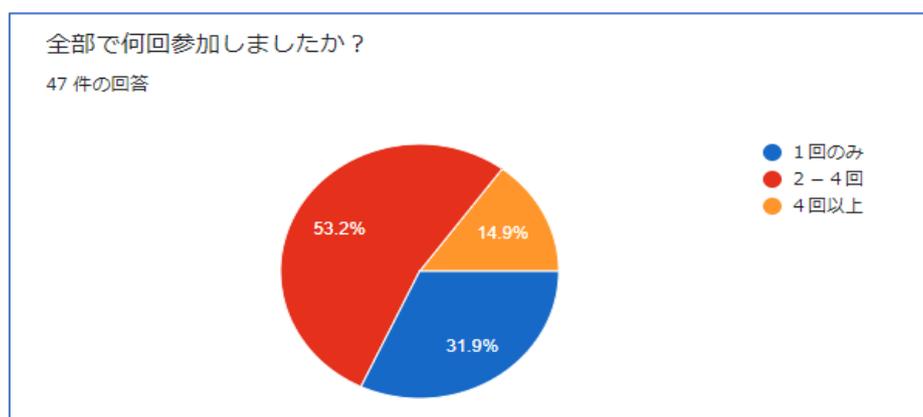
図1 セッションへの参加時期



全体的には前期のセッションへの参加者数（270名）が後期の参加者数（220名）を大きく上回ったが、アンケートが行われたタイミングが後期終了後であったため、実際の参加者数がこのアンケート結果にうまく反映されていないものと考えられる。昨年度までに実施されたアンケートの傾向からも、新生は前期にはセッションへ積極的に参加するものの、後期になると参加回数が減少することが明らかになっている。この原因としては、後期に大学祭があることや冬期休業前にセッションを終了することが考えられるが、令和元（2019）年度は、共通教育科目の海外研修プログラムに参加する学生にセッションへの参加を強く促したことにより、後期のセッションへの参加数が若干増加している。

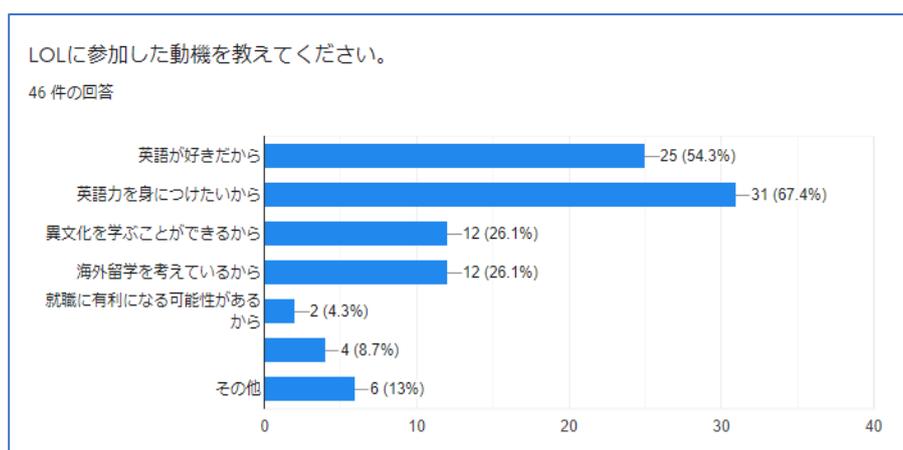
次に、何度セッションに参加したかを尋ねたところ、図2に見られるように、68%を超える参加者が一度以上セッションに参加しており、23%の学生は四回以上参加したと回答している。多くの学生がリピーターとして繰り返しセッションに参加していることから、セッションの内容が好評であることが窺える。

図2 セッションへの参加回数



続いて、セッションへの参加理由を尋ねたところ、67%の学生が英語能力の向上のためと回答し、54%の学生が英語が好きであるためと回答した（図3）。これらの回答から、セッションに参加する学生の半数が英語学習に肯定的な姿勢を持っていることがわかる。また、海外留学を視野に入れている学生も多く、グローバルに活躍したいと考えている学生の足がかりとなるという観点からも、セッションの有効性が窺える。

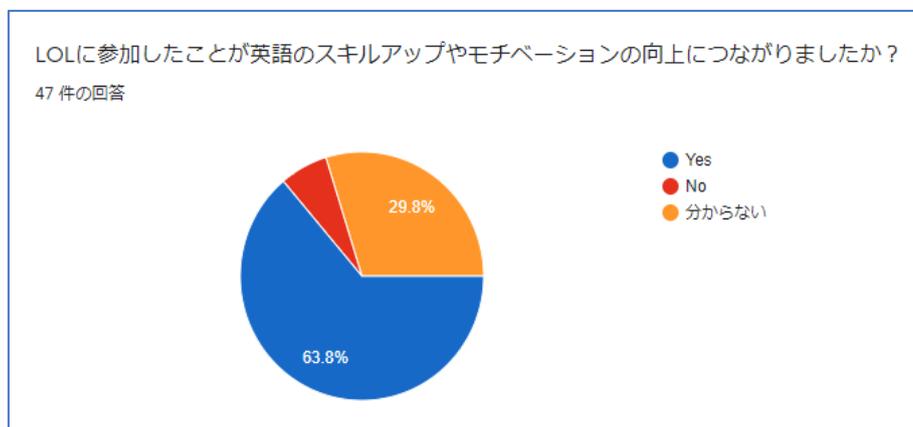
図3 セッションへの参加動機



英語学習に対する意欲の変化

前項にて、セッションに参加した学生の学習意欲はもとより高いことが窺えたが、実際にセッションに参加したことが英語のスキルや学習意欲の学習の向上に繋がったかどうか回答を得た。結果、全体の63%を超える学生から肯定的な回答を得た（図3）。

図3 英語の技術や学習意欲の変化



肯定的な意見に関する詳細な理由としては、「簡単なコミュニケーションを通して英語の楽しさを感じることができたため。」「会話をしながら笑ったりしている人を見てカッコいいと思った。」「ゲームの中で英語を使うことができてとても面白かった。」「参加している人たちの英語力に感化されたから純粋に楽しめたので英語を勉強しようという気持ちになった。」などが挙げられる。

セッションの改善点

アンケートの最後の項目として、セッションに対する改善点を述べてもらったところ、学生から様々な回答が得られた。大まかな傾向としては、まず「もっと告知をして欲しい。」「まだまだ存在を知らない人が多いと思う。」など、さらに大々的な宣伝が必要である旨を述べる学生が多かった。また、「一対一で会話がしたい」「英語を話す留学生にアシスタントとして参加してもらい、その人たちとも日常会話がしたい」など、一人あたりの会話の機会をより増やして欲しいという意見も見られた。

今後の展望

アンケートの結果から、次年度以降のセッションの運営においては、まずセッションの宣伝が第一の課題と言える。前期だけでなく、後期のセッションも積極的、継続的に宣伝することで、後期も学生が継続して英語学習が行えるよう配慮する必要がある。このためには、担当教員が宣伝活動を行うだけではなく、共通教育科目で英語を担当する非常勤講師や他学部の英語教員の協力が必要不可欠であるため、教員間でより密に情報交換を行い、連携して活動を行っていききたい。また、一人一人への会話の機会をより多く提供するためにも、参加人数によっては、今後のセッションを能力別 (Beginner, Intermediate, Advanced など) に分けて行うことなども考えられる。

さらに、セッションを行うだけではなく、ESS English Speaking Society at Kadai への場所提供など、LOL ラウンジ自体をさらに学生主体で英語学習を行う場として使用したり、オープンキャンパスで LOL の活動を紹介したりするなど、地域との関わりを持つ場としても活用したい。令和元 (2019) 年の取り組みのように、海外研修を考えている学生のための事前学習の場としての使用も継続する予定である。

令和 2 (2020) 年のセッションは現在オンラインで行われており、すでに広報用のビデオや SNS を通じて宣伝が行われているため、対面授業が開始した後も多くの学生がセッションに参加することを期待している。

E. 外国語教育部門（英語）の運営について

E-1. 英語教員の役割

授業以外の仕事でも共通教育センターの英語専任教員は多忙である。センターの指定会議の他、毎月の英語ミーティングがあり、この時に共通教育英語の運営について話し合っている。英語の事務的役割が多く、平成 29（2017）年度から本格的に英語教員の役割分担を行っている。令和 2（2020）年度の英語教員役割分担が以下のようにある。

令和 2（2020）年度英語教員の役割	
役割分担	
進行役	藏本、内尾
開講コマ調整	ネバラ、ブレイジア、原
教育（カリキュラムなど）	金岡、ハムチュック
L0L 外国語ラウンジ	ブレイジア、日高、ギュレメトヴ
外部試験	原、村山
教科書選定	原、藏本
補習教育・修学支援	村山
FD	内尾、ハムチュック
報告書	高橋
留学生のプレイスメント	ネバラ、トレマーコ
ICT 活用教育	ブレイジア
記録係・書記	日高、ギュレメトヴ
「英語教育の成果」など	全員（リーダー：ネバラ、金岡、原）
その他： *入試作成・採点 *海外引率 *学部での授業 *プラットフォームでの授業 *教養教育での授業 *初年次セミナーの授業 *学生個人の外国語指導 *学内・センター内の委員	

教員全員が原則として運営に貢献している。開講コマ調整、L0L 外国語ラウンジ、外部試験、

教科書選定、FD などの大変忙しい役割もある。また、英語ミーティングに必ず議事要旨を付けている。英語教育の報告書も毎年のように全員参加で作成している。これらの他、入試作成・採点、海外引率、学部での授業、プラットフォームでの授業、教養教育や初年次教育での授業、や学内・センター内の委員もやっている。

上記のことからお分かりいただけると思うが、毎月の英語ミーティングや毎年のような英語教育に関する報告書が英語教員間の連携を表している。共同型の教育課程運営により、責任を持ってカリキュラムなどの管理や点検を行っている。各クラスの難易度（レベル）、内容（共通シラバス）、テキスト（推奨教科書リスト）、成績評価基準（成績分布に関する申し合わせ）などが標準化されている。1～2 年次のカリキュラムも体系化されて、英語教育に関することなら全てをエビデンスと実践で検証しながら、理想的な教育に向かって進んでいる。教員活動のエビデンスの一例として、令和元（2019）年に大学図書館のレポジトリに登録された 72 ページに及ぶ「鹿児島大学 平成 29（2017）－平成 30（2018）年度 共通教育英語教育活動報告書 II」が保管されている。この報告書は大学改革支援・学位授与機構の教育の内部質保証に関するガイドラインに基づき、約一年間をかけて英語プログラムの分析・評価を行い、英語教育改善に努力した、という証拠になる。英語教育の教員は自主的かつ協動的にプログラムの改善・改良ができるということである。

E-2. FD 活動（ワークショップなど）について

E-2-1. 平成 30（2018）年度第 1 回共通教育センター教員ワークショップ

第 1 回目は平成 30（2018）年 9 月 21 日（金）10:30～15:05（12:10-13:30 昼食）に、「CLIL（Content and Language Integrated Learning）授業の評価方法について学ぶ」と題し、郡元キャンパス共通教育棟（1 号館 4 階 Common Room 3）にて開催した。参加対象者は、外国語教育に関わっている全教員（専任教員、非常勤講師）またその他、本ワークショップに関心のある方とした。

今回の趣旨は前回の教員ワークショップの続編として CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）の評価について学ぶため、前回のゲスト講師池田真氏（上智大学文学部英文学科教授・文学部英文学科長）を再度お招きし、“Assessment in CLIL (Content and Language Integrated Learning): Tests, rubrics and feedback” という講演題目で、午前と午後の部に亘り講演していただいた。午前の部は、CLIL 授業の評価方法の理論について講演がなされ、CLIL 授業の基礎知識、CLIL 授業のテスト作成についてご教授いただいた。午後の部では、実践編として授業評価用のルーブリック作成と使用方法、また学生の課題を効果的にフィードバックする方法について学んだ。

当日の参加人数は合計 27 名（理工学研究科 3 名、理学部 1 名、農学部 1 名、共通教育センター 16 名、非常勤講師 6 名）だった。事後アンケート（回答者 21 名）によると、14 名

が「ワークショップは有意義だったと非常に思う」、7名が「少しそう思う」と回答した。

前回のワークショップの内容を踏まえ、CLIL 授業における評価について理論と実践の両面から学ぶことができた。また、CLIL 授業に限らず、担当授業のテスト、評価方法について考える良い機会を得ることができた。

E-2-2. 平成 30 (2018) 年度第 2 回共通教育センター教員ワークショップ

第 2 回のワークショップは、平成 31 (2019) 年 2 月 19 日 (火) 10:30~14:40 (12:10-13:10 昼食) にて「共通教育の英語授業について考える」と題し、本学郡元キャンパス 共通教育棟 1 号館 4 Common Room 2 とコンピュータールーム 123 号室にて開催した。

午前の部では、これまで実践してきた共通教育の英語授業を振り返り、授業における問題点とその解決方法についてグループディスカッションを行い、授業内容の向上に役立てることを目指した。議題については、事前に参加者に英語授業に関するテーマ・関心事、問題等を伺い、議題とした。議題としては、英語が苦手な学生への効果的な指導方法、クラス運営、グループ・ペアワークの実施、授業外学習、学生の動機付け、テキスト・教材、manaba の活用方法等があった。

午後の部は、高等教育研究開発センターの森裕生先生をお迎えし、英語授業での manaba の基本操作と活用方法について学んだ。内容としてはコースニュース、レポートと小テストの設定、レスポンの使用方法、コメントペーパー、授業支援ボックス、グループプロジェクト等の機能についてご教授頂いた。

ワークショップ当日の参加者人数は、合計 14 名 (共通教育センター 11 名、非常勤講師 3 名) だった。事後アンケートでは (回答者 13 名) 12 名はワークショップの内容が「非常に有意義だったと思う」、1 名が「少し有意義だったと思う」と回答した。

今回のワークショップで、日頃の授業で抱えている悩みと疑問について、共通教育センターの英語教員と非常勤講師が情報交換を行うことができ、授業で直面する疑問と問題解決へのヒントを分かち合うことができた。また、manaba を英語授業に活かせる方法も学び、次年度の授業効率化を図ることが可能である。



【平成 30 年度第 1 回 FD ワークショップ】



【平成 30 年度第 2 回 FD ワークショップ】

E-2-3. 令和元（2019）年度 第 2 回外国語教育部門教員ワークショップ

これまで開催してきた FD ワークショップは令和元（2019）年度より外国語教育部門（既習外国語・初修外国語）として行うことになり、既習外国語（英語）は本年度第 2 回目を担当した。本ワークショップでは、講師に東京電機大学工学部の広石英記教授（教育改善推進室長、日本 PBL 研究所理事）をお招きし、令和元（2019）年 9 月 24 日（火）10:00～12:45 にて、「教養と専門教育をつなぐ PBL」と題し、郡元キャンパス共通教育棟（1 号館 4 階 Common Room 2）にて開催した。参加対象者は、外国語教育に関わっている全教員（専任教員、非常勤講師）またその他、本ワークショップに関心のある方とした。

ワークショップの内容は近年、高等教育機関で盛んに導入されている PBL の教育方法の意義や手法について学び、その際、汎用的能力の獲得を志向したプロジェクト学習（Project-based Learning）と、専門的な知識・技能の熟達を志向した問題基盤型学習（Problem-based Learning）という二つの PBL の特性の違いについて学んだ。さらに、具体的な実践事例を紹介することにより、本学教員が担当する授業に応じた PBL のデザインの基本的考え方についてお話しいた。ワークショップ後半は 3、4 人のグループに分かれ、PBL に基づいた授業プランを提案した。

当日の参加人数は合計 24 名（専任教員：教育学部 1 名、歯学部 1 名、共通教育センター 14 名、その他 3 名 / 非常勤講師：英語 1 名、地学実験 1 名、異文化理解 1 名、その他 1 名）だった。事後アンケート（回答者 18 名）によると、16 名が「ワークショップは有意義だったと非常に思う」、2 名が「少しそう思う」と回答した。



【平成 31 (2019) 年度第 2 回外国語教育部門 (英語) 教員ワークショップの様子】

E-2-4. 本ワークショップの意義と今後の課題

外国語教育部門 (既修外国語) では、本 FD 教員ワークショップをとおして、より充実した共通教育の英語授業を目指してきた。これまでの授業を振り返りながらシラバスの見直しを重ね、学生のニーズに応えられるように授業内容の改善の糸口を模索してきた。さらに、これまで外部講師をお招きしたワークショップで見解を広げ、教員同士のコミュニケーションと情報交換の場を設けることで授業改善に努めてきた。今後も常に学生のニーズを模索しながら、専門科目につながる英語授業を目指せるよう、本ワークショップをとおしてその学びの場を設けたい。

E-3. 報告書について

新英語カリキュラムは、従前のカリキュラム (平成 20 (2008) ~平成 27 (2015) 年度) を換骨脱胎のうえー新し、平成 28 (2016) 年度より始動したが、これを機に、あらたな報告書が 2 点、刊行されている (鹿児島大学図書館レポジトリー所収)。

- ・『鹿児島大学平成 28 (2016) 年度共通教育英語教育活動報告書』(平成 29 (2017) 年 9 月)
- ・『鹿児島大学平成 29 (2017) -平成 30 (2018) 年度共通教育英語教育活動報告書Ⅱ』(令和元 (2019) 年 3 月)

平成 29 (2017) 年版と令和元 (2019) 年版の両者が共通に扱う内容は、英語外部試験 GTEC、それに基づく優秀学生の表彰制度の運用、学生アンケート結果、FD・ワークショップである。その他、令和元 (2019) 年版には、平成 28 (2016) 年度導入の英語カリキュラムに係るテキスト・教材、試行期間以降の外国語ラウンジ LOL の運営、ならびに学修支援も併せ

て、扱っている。

既刊の報告書が触れていない、直近の平成 31 (2019) 年度の英語教育活動に係る報告は、別途、本報告書（英語教育の成果）の要点や、必要に応じ、その他の事項を含めて、令和 2 年度中を目途にとりまとめ、刊行される見込みである。

なお、両報告書（平成 29 (2017)、平成 31 (2019)）が刊行される以前には、共通教育センター外国語教育部門の前身にあたる、教育センター外国語教育推進部による報告書『鹿児島大学 英語教育改革 報告書』が 4 冊、公刊されている（平成 22 (2010)、平成 23 (2011)、平成 25 (2013)、平成 26 (2014)；いずれも発行・編集：鹿児島大学教育センター外国語教育推進部）。

F. その他の活動について

F-1. 補習教育について

補習教育については、共通教育センターでは補習教育の在り方検討 WG への参画等を通して、共通教育英語科目との連携という点から関わり続けている。ここでは、これまでの主な成果として次の 2 点を報告する：

- 入学前・入学後の補習教育対象者の取り組みの実態と課題の把握
- 補習教育対象者が共通教育英語科目を支障なく履修するために必要な対応の検討

まず、平成 29 (2017) 年度と平成 30 (2018) 年度は、入学前補習教育対象者について入学前・入学後の英語学習の実態を把握する取り組みを行った。具体的には、共通教育科目の各クラスに補習教育対象者がいる場合、当該者の名簿や e-Learning での入学前補習教育の取り組み状況などの情報を授業担当者に通知した。また学期終了時には、当該授業担当者に対して、翌学期の授業担当者宛に所見等の申し送りを行うよう依頼した。これらの取り組みから次の点が確認された：e-Learning での入学前補習教育の取り組み状況は、全体的に十分とは言い難い。一方で入学前補習教育対象者が入学後の英語科目で配慮を必要とする事例は少なく、成績が不可となることもほぼない。

これらの点を踏まえて、令和 2 (2020) 年度の補習教育実施に当たっては、補習が切に必要な学生が受講し、教員もより指導しやすくなるよう対応を検討し、WG で進言した。まず、入学前に身につけておくべき英語力を、高校で展開される英語科目のうち「コミュニケーション英語 I」「コミュニケーション英語 II」「英語表現 I」とした。AO、推薦 I 入試による入学者である補習対象者の多くが、商業・工業・農業高校など専門学科の出身となっている。これらの高校の多くでは、鹿児島市の教科書販売店を通じて調査した結果、「英語表現 I」を履修していないことが分かった。そのため、補習教育でもその内容を「英語表現 I」と定

めた。実施形態についても、今回は e-Learning は行わず、従前から入学直前と入学直後に実施されてきた短期集中授業を拡充させる形に変更されたが、この授業内容を「英語表現 I」の範囲とした。これによって、授業開始前に必要な英語力の差を補う機会ができ、入学後の共通教育英語科目のより効果的な運営が期待できる。

F-2. 修学支援について

修学支援という概念は、学修を含めた大学生活全般にわたる支援という含みがある。その意味では、鹿児島大学の場合、障害学生支援センターが母体となり、その働きを、全学をあげて教職協働のもとで支えている。

鹿児島大学共通教育センター外国語教育部門主催による、平成28(2016)年度第2回教員ワークショップでは、テーマの一つとして、Equality, Diversity, and Inclusion (修学支援や学習支援が必要な学生への対応など)が設定され、参加者全員への基礎情報提供という意味も含め、障害学生支援センターより今村千佳子先生をお招きし、直接、お話しいただいた。参加教員からは、たとえば、必要とあれば、協力を惜しまないとのコメントも寄せられた (e.g. ...Concerning students with disabilities, if possible, we need to discover a way to help these students earlier in the academic year.)。

結語

本報告書では、鹿児島大学共通教育センターの英語教育の成果を取り上げた。本大学の英語教育には魅力的なところが多々あるということを知っていただけたと思う。しかし、改善・改良できるところは全くないという訳でもない。結語では考えられるプログラムの改変について触れておく。

先ず、現在の英語教員とコマ数を堅持するのは必要不可欠であるとの理解を得たと考えている。しかしながら、予算的にも人員的にも共通教育英語は現状以上の負担を負いかねる。また、1年次と2年次ばかりに英語教育を入れるのは言語習得の理念に反することになるため、3年次と4年次(学部によって5年次と6年次)に専門教育における英語教育をもっと取り入れるべきである。令和元(2019)年12月に行われた鹿児島大学の教職員ワークショップ「学生調査の結果をいかに活用するか：大阪府立大学の取組」で、講演者の畑野先生から同様の指摘があった。大阪府立大学の場合、学生データから判断して、専門教育に英語の科目を結局増やした、ということである。他大学(大阪大学や神田外語大学など)も同様、英語の語学力を強化するため、英語の学修単位を増やしている。もちろん、専門教育との関係で英語にたくさんの単位数を割けないであろうが、専門教育の中で英語を学ぶ又は英語で学ぶ科目の比率を例えば5~10%のカリキュラム目標にすることは考えられる。しかし、言うまでもなく英語を過度に重視するという事ではない。また、英語を使う必要性が高く

ない学部があれば、共通教育英語の1年次～2年次の科目だけでも充分かもしれない。

それでもなお、専門教育の英語教育に関して二つの大きな課題がある。まず、専門教育と言っても、1) 学術英語(アカデミック・イングリッシュ)を中心にするか、2) TOEIC対策などのビジネス英語を中心にするか、この二者択一に迫る。両方を選択してしまう場合、英語科目単位数の増加が限られているので、両方とも中途半端なところまでしか到達できないという恐れがある。

もう一つの課題は、1) 学部の学生全員に平等に英語教育の機会を与えるか、2) 一部のやる気のある、どちらかと言うと英語エリートを育てるか、という選択肢である。全員の英語力を伸ばそうとすれば、コストがかかる上、一部の学生はどうしても伸びない。一部の学生だけを英語エリートに育てれば、例えばGlobal Engineer/Global Scientist 特別養成コースの場合、コストがそれほどかからないが、このコースに参加しない学生は残念ながら伸びない。

この二つの課題(「アカデミック英語」対「ビジネス英語」、「全員に提供」対「一部に提供」)は、各学部で議論して決めなければいけないが、例えばビジネス英語を選ぶ場合、共通教育英語もアカデミック英語中心の英語IVをビジネス英語に変えて対応できると思う。いずれにしても、共通教育英語と学部の英語は連携・接続を今以上目指すべきであろう。

また、TOEICなどの外部試験の導入について英語教員の意見として言わせていただく。新しい外部試験の導入自体には反対をしていないが、外部試験による短絡的な成果主義・数値主義を避けるべきだと強く思っている。外部試験中心の英語教育になってしまえば、英語運用能力を伸ばすための教育に悪影響になる可能性が高い。つまり、ウォッシュバック効果(テストの影響)によって本来目指すべき教育に歪みが出る危険性が高い、とテスト理論の専門家が指摘する。従って、TOEICのような外部試験を導入すれば、英語教育の弊害にならないよう、早くとも2年次後期または3年次前期から取り入れるべきであろう。

また、令和2(2020)年度前期には新型コロナウイルスの影響により、外国語教育部門がeラーニングを含めたオンライン授業を実施し、対応した。教育の質を維持するために、対面型授業の必要性が益々否定できないと思うが、eラーニングを取り入れながらハイブリッド型の授業を一部導入することについて考慮する余地もあると言える。

ここまで正課のカリキュラムについて少し考えたが、正課外のプログラムなども改善・改良できるはずである。共通教育英語と学部の英語には当然限りがある。そのため、現在不十分である語学支援体制の強化が必要となる。いくつかの例を挙げると、1) 語学研修などの海外プログラムの強化、2) LOL 外国語ラウンジやP-SEG やグローバル・ランゲージ・スペースの拡大(または統合)、と3) 上級生のための論文添削や発表指導(学部レベル)などが検討できる。もう少し極端な話として、グローバルセンターと共通教育センター外国語教育を統一すれば、相乗効果が期待できるかもしれない。外国語教育部門の教員として共通教

育センターに愛着を感じているが、山形大学が語学教育（英語、初修外国語、日本語）と多文化共生実践教育（異文化理解や留学支援）を合わせて、多文化共生教育センターを立ち上げた例もある。

最後に、英語教員側の要望がある。学生の英語運用能力の向上のためには、下記のような改善が望ましいと感じる：1) 教員の増員・教員の昇任、2) クラスサイズの縮小、3) 教育環境の充実、4) 資源の有効利用、5) 業務の簡素化、や 6) 教員研修機会の確保。しかし、何よりも英語教育プログラムに改善・改良が必要と思われる場合、部門の教員が語学の専門家として決定プロセスに参加させていただきたい。

鹿児島大学共通教育 英語教育活動報告書 III

—英語教育の成果について—

令和2（2020）年7月31日発行

編集・発行：鹿児島大学 総合教育機構 共通教育センター 外国語教育部門（既修語系）

Nevara, John*、金岡 正夫*、原 隆幸*、高橋 玄一郎*、村山 陽平、
Tremarco, John、Brasier, Anne、Hamciuc, Monica、Gyulemetov, Nikolay、
内尾 ホープ、藏本 真衣、日高 佑郁 (*編集)

〒890-0065 鹿児島県 鹿児島市 郡元1丁目-21-30

TEL: 099-285-3705
